

# 川柳の雑記

麻生路郎 ☆ 主筆



moji

Pensoj flugas trans la land-limon  
THE SENRYU ZASSHI

新春號

No. 368

—2月本社句会—

割ち非 引取満力  
兼題

川柳雑誌社主催

# 新春川柳大会

明けましてお芽出とうございます。  
路郎主幹が久々に出席されます。一人のこらぢ  
ご出席ください。お待ち申しております。

日時 一月十二日(日)午後一時

場所 光明寺 (電話の九二六〇)  
大阪市天王寺区下寺町二丁目バス停前  
(市電下寺町又は日本橋三丁目下車)

兼題

「犬」(三想) 麻生 葎乃 選 栗  
「もの好き」(三想) 北川 春巢 選  
「ゆめ」(三想) 川村 好郎 選  
「古手」(三想) 小川 恒明 選

席題

三題(当日発表)

中島 生々 庵  
麻生 路郎 選

柳話

三十二年度不朽洞賞杯争奪決戦  
(出場資格三十二年度カップ受賞者)

川柳紅白試合

出席者 全員  
出席者 有志

余興

(当日のお楽しみ)

表彰

☆昭和三十三年度不朽洞杯優勝者  
☆一九九九年間本社句会全出席者  
☆兼題「犬」天位に不朽洞賞

呈賞

☆各題天位  
☆紅白試合優勝側全員に租賞

幹事

紫香・いさむ・与呂志・一三夫・賀峯・一飄・  
潮花・摩天郎・薰風子・十悟・月都・無鬼・貴山・  
白水・凡九郎・淡舟・清子・梅里・晃・操子・  
杜的・竹荘・東洋男・水堂

★新春懇親小宴(散会后) 会費五百円

—会場「大萬」阿倍野区松崎町三ノ一〇

川柳雑誌社句会部

電・住吉 六〇八一

# 日本盛酒坊

東京八重洲口名店街・大阪千日前歌舞伎座南角

灘の清酒 二ホンサカリ



和やかに まず一杯

# 川柳雜誌社不朽洞會會則

## 第一章 總 則

- 第一條 本會ハ川柳雜誌社不朽洞會ト称ス
- 第二條 本會ハ事務所ヲ大阪市ニ置ク
- 第三條 本會ハ純正川柳ノ向上發展ヲ図ルヲ以テ目的トス
- 第四條 本會ハ前條ノ目的ヲ達成スルタメ左ノ事業ヲ行フ

- 一、麻生路郎師(以下師ト称ス)ニ師事シ、川柳ノ研究並ニ會員相互ノ親睦ヲ図ルタメノ會合
- 二、其ノ他必要ナル事業

## 第二章 會 員

- 第五條 本會ノ會員ヲ別チテ左ノ五種トス
  - 贊助會員
  - 洞友會員
  - 特別會員
  - 維持會員
  - 正會員
- 第六條 A地区正會員(大阪府・京都府・兵庫縣・奈良縣・(和歌山縣)ハ會費トシテ月額金一二〇円、B地区正會員(A地区外ノ府県)ハ月額金一〇〇円、C地区(海外)ハ維持會員又ハ特別會員費トス

- 維持會員及ビ特別會員ノ會費ハ夫々各地区共通トシ、維持會員費ハ月額金一七〇円、特別會員費ハ金二二〇円以上ヲ半年又ハ一箇年前納スルモノトス、新ニ會員タラントスルモノハ入會金トシテ會費一箇月分ヲ要ス、但シ既納會費ハ一切返還セザルモノトス、但シ贊助會員及洞友會員ニハ會費ヲ徴収セズ
- 第七條 特別會員、維持會員ハ師ノ推薦又ハ理事長之ヲ推薦シ師ノ許諾ヲウクルモノトス
- 第八條 左ニ該当スルモノヲ贊助會員、洞友會員トス

- (一) 贊助會員
  - 會ノ趣旨ニ賛同シ特殊ノ支援ヲ与エラレル方ニシテ師ノ推薦ニヨル
- (二) 洞友會員
  - 1 柳界ノ權威ニシテ本會ノ趣旨ニ賛シ事業ニ協力スルモノ
  - 2 本會ニ特ニ功績アルモノ
  - 3 洞友會員ハ師ノ推薦ニヨル

- 第九條 會員ハ「川柳雜誌」等ノ配布ヲ受クル外希望ニヨリ批評添削ノ特典ヲ享有スルモノトス(細則ハ別ニ之ヲ定ム)
- 第十條 理由ナク會費ヲ滞納セルモノニハ雜誌ノ配布ヲ停止シ、又ハ理事會ノ決議ニヨリテ退會セシムル事アルベシ

- (一) 本會ノ名ヲ汚ス行爲ヲナシ又ハナサントスル惧レアリト認ムルトキハ理事會ノ決議ニヨリ會員ノ資格ヲ喪失セシムルモノトス
- (二) 議ニヨリテ退會セシムル事アルベシ

## 第三章 役 員

- 第十一條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
  - 理事長 一名
  - 副理事長 二名
  - 常任理事 若干名
  - 理事 若干名
- 第十二條 理事長ハ會務ヲ總理ス、副理事長ハ之ヲ補佐シ理事長事故アルトキハ代行ス
- 第十三條 役員會ニ於テ必要ト認メタルトキハ雜誌委員ヲ出席セシムルコトヲ得
- 第十四條 會則ニナイ事項ハ役員會ノ申合セニヨリ処理ス

## 第四章 會 計

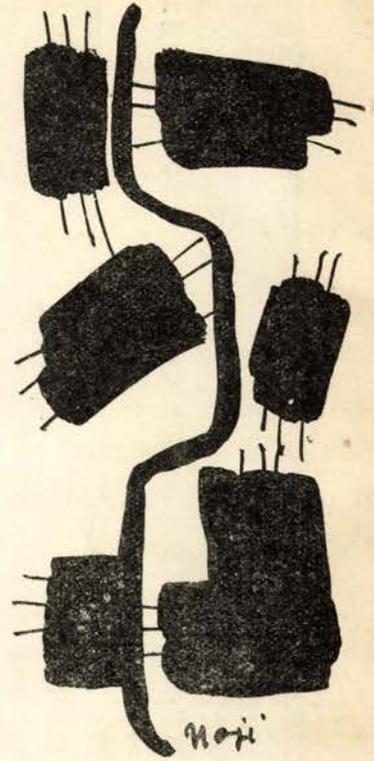
- 第十五條 本會ノ經費ハ篤志家ノ贈金其ノ他ニヨル但シ會費ハ全額ヲ「川柳雜誌」編輯費ノ一部トシテ繰入レルモノトス
- 附 則 本會則ハ理事會ノ決議ニヨリ變更スルコトヲ得

以上  
(昭和廿六年三月改正)



# 不朽洞句帖

麻 生 路 郎



三悪も追放出来ぬままの春

世界がどうなろうとも炬燵に居

富士山はしんしんと云う雪でなし

葉牡丹のつかみどころなし哲人の如く

用を持って来てお大事にお大事に

武者小路の画なんか俺にも描けそうだ

不平も云わぬ妻だ長生きするならん

ネストンもあるじゃないのとすすめられ

## 目次

題 字	麻生路郎
表 紙	野尻 弘
不朽洞句帖	麻生路郎 (三)
川柳家の二十四時	戸田古方・清水米花 (六)
	長野文庫 (七)
新春川柳の鑑賞	麻生路郎 (四)
勤務評定と川柳	長野文庫 (三)
麻生路郎の	高鷲 重純 (二)
川柳人的立場	山田 季賛 (三)
初 笑	い
今年はずいこれ	諸 家 (三)
実行してみたい	川柳に使わ
れる文字	不二田一三夫 (六)
句評リレー	久米雄・緑之助 (一八)
	日満・千太郎 (一八)
全国名物と	水谷 竹荘 (三〇)
川柳行脚	富士野鞍馬 (三〇)
巴 御 前	文蝶・豆秋 (二六)
當茂歳初春放談	一三夫 (二六)
天位 番付	河井 庸佑 (三三)
川 柳 塔	麻生路郎選 (六)
同 舟 近 詠	諸 家 (一〇)
近 作 柳 緯	麻生路郎選 (一〇)
	北川春葉選 (一〇)
一路集「メ	松江梅里選 (三六)
寄」	田中鳥雀選 (三六)
附」	麻生霞乃選 (二九)
金 泥 集	(二九)
各地 柳 壇	(三八)
入門 講座	(三八)
研究題「曆」	戸田 古方 (二八)
不朽洞会から	(三五)
柳界 展望	(三五)
編集 録 音	(四三)



川柳夫婦善哉

霞乃女史・路郎主幹

三十二年一月、【中島雪で罷された川柳  
婦人友の会席上にて（中島孝之君撮影）

# 新春川柳の鑑賞

—それぞれの句に春色ただよう—

## 麻生路郎

うでも一般に行われているのがいいのかも知れない。そこに「やった通りの文句で来」が生れるのである。受取ってニンマリと笑っている顔が見えるではないか。

松の内まだ一軒を飲み残し

(霞乃)

元日のどこかで笑う声がする

(梅志)

ぬ日である。一切は議論抜きで平和あるのみの日である。そこには労資の対立もない。自由・社党的いのみあいなと云うのである。

年賀状女将の書いたものでなし

(夜潮)

炬燵で年賀状をみていると、いきつけの料亭の女将からの年賀状が出て来る。女将

自身が書いたにしては達筆すぎる。達筆な女将もいないことはないが舌がまわるほど、手の動く女将は少ないものだ。多分常連の代筆だろう。イヤ、それに違いないというところを「書いたものでなし」と断定しているところに穿ちがある。

年賀状やった通りの文句で来

(幽王)

元日は日本晴のいい天気だ。いつもよりは暖かか何んとなく長閑である。そうだ、この調子で、ことしの三百六十五日が続いて欲しいものだという元日の希望的所感の句

年賀状の文句も長い間に型が出来てしまった。それでこの句が面白いのである。少しぐらい型を破って見てもいや味であったり、角ばり過ぎたりしてあまりパツとした文句は出来ない。やはり月並なよ

退職  
退職と云う前書がついてい  
るのを見ると、暮に勤め先を  
勇退したのであろう。新らしい  
年を迎えて捲土重來の覚悟  
をかためたことを詠んだもの  
で「元日の土を踏む」は力強

(緑之助)

お元日右も左もなかりけり

(湧三)

元日ばかりは誰にとっても上々吉のご機嫌である。イヤ、ごきげんであらねばなら

長閑さよつづけ三百六十五

(湧三)

元日が日本晴のいい天気だ。いつもよりは暖かか何んとなく長閑である。そうだ、この調子で、ことしの三百六十五日が続いて欲しいものだという元日の希望的所感の句

元日ばかりは誰にとっても上々吉のご機嫌である。イヤ、ごきげんであらねばなら

炬燵で年賀状をみていると、いきつけの料亭の女将からの年賀状が出て来る。女将自身が書いたにしては達筆すぎる。達筆な女将もいないことはないが舌がまわるほど、手の動く女将は少ないものだ。多分常連の代筆だろう。イヤ、それに違いないというところを「書いたものでなし」と断定しているところに穿ちがある。

年賀状やった通りの文句で来

退職  
退職と云う前書がついてい  
るのを見ると、暮に勤め先を  
勇退したのであろう。新らしい  
年を迎えて捲土重來の覚悟  
をかためたことを詠んだもの  
で「元日の土を踏む」は力強

い表現である。仕切直しは相撲用語であるが、「土を踏む」という下五に巧くマッチしている。

### 丹前のまんま元日撮される

(味平)

和やかな元日、朗らかな家庭。「お父さん、写真を撮ってあげよう」とこどもの云うがままに、カメラの前に立ったのである。それは丹前のままの平和な姿であった。

### 長女にも俺が酌いだるお元日

(方大)

「お前も飲め」と、お父様は二機嫌である。「でも」と長女が尻込みするのえ。

「今日はお元日だ。いいよ、いいよ。お父さんが酌いでやろう」と云うところである。

### 電停にベンキが匂うお正月

(香林)

電停で電車の来るのを待っていたらベンキの匂いがプー

物足りないのである。「印刷

でない」がこの句のヤマである。

### 正月の炬燵女にとられたり

(明珠)

女と云うものは常に家庭のことにかまけているので、なかなか炬燵になんかあたって

いるひまのないものである。せめてお正月だけでもあたる

ひまがほしいと思うのである。今日は寒いから炬燵に居ようと思つたら、もうちゃんと

### まな板の白々として三ヶ日

(水車)

せめて三カ日だけは台所で働らきたくないと言うので、お正月のごちそうを暮のうちにつくっておくのである。そのためにまな板などはすっかり乾ききって白々として何んだか寒いような気がしたと云う感じを詠んだのである。

### 一年の計呑みながら呑みながら

(二善)

どんな一年の計であるかは、この句からは判らない。その内容はどうでもよいのである。この句は一年の計という重大なことをきめるのに、酒を飲みながらやっている。と云うところに焦点がある

### おとがいも浸けて初湯のちと溢れ

(閑生)

二日の朝は早くから風呂に入るのであるが、おとがいまでも浸ける心のゆとりが、いかにも初湯らしいのどかさをあらわしている。「ちと溢れ」で、グツと湯槽に深く身を沈めた情景が眼に浮ぶのである。

### 元日の小言半分程で止め

(千石)

小言を云わねば飯の味がまづいと云う人でも、元日ばかりは小言を云っちゃいけない

ぐらいなことは心得ているので半分ほどでやめたと言うのである。この句は大して新味

はないが習性のおそろしさを詠んだ面白さはある。

見なれたる山河であるが初

### 葉書一枚とも云えぬ社長の年賀状

(賀峰)

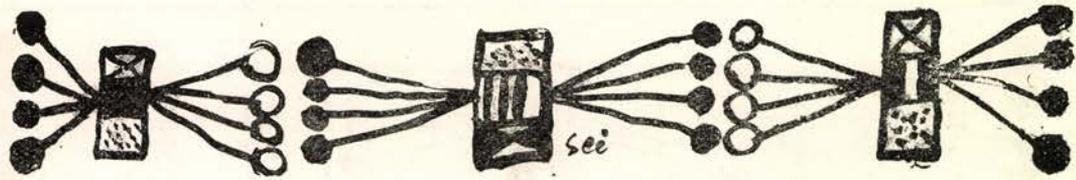
社長の年賀ハガキは一万出して五万円はいる。そのうちの大半は宣伝であろうが、それにしてもたいしたものがある。ハガキ一枚とは云えない金かさである。とは平社員

のソロバンである。社員の年賀状とはケタが違うのであきれるのも最もな話だ。おとがいも浸けて初湯のちと溢れ

### 見なれたる山河であるが初日の出

(伍健)

山にしても河にしても、見なれた景色ではあるが、そこへ紫の雲がかかり、大きな初日が顔を出すと何んとも云えぬ厳肅な気持ちからだ中にみなぎり、新年の心がまえを新らたにさせられるものがある。



惚れた眼で見ても知性が疑われ

三角のスリルへ命かけるとは

八月児と云うことにして産ませとき

東京都 宮田不二

冬来りなばスキー靴ねだり

堺市 川村好郎

集金屋さんへ畳で犬が吠え

むさんこに辞めたい日なり喫いつづけ

どしゃ降りがモデル住宅からつかり

ホノルル市 築山快夢起

颯爽と嫁が新車を乗り回し

文化財らしいおつむの禿げ具合

米子市 三鴨美笑

み仏と住めば返事はせず済み

臥床から指図してやる障子張り

屋からは雨が来ると母帰り

人のことだから気安め云うて去に

大阪市 須崎豆秋

秋の夜の隣なにやら釘を打ち

旅に出てまでもパチンコ屋を探がし

見る目ほど幸福でない自家用車

うららかに元旦となる小鳥店

大阪市 正本水客

妹とおもて欲しいと云う返事

真相へ看護婦さんの口かたく

鞆持くしやみしながら従いてゆく

愛情の問題よなどしやらくさし

大阪市 丸尾潮花

肩先を打たれ見とれたのに気付き

年の暮会費の酒で酔うて去に  
靴音が似てて新婚撥を置き

大阪市 北川春巢

令夫人なる程内助の功の顔

我ながら酒に飲まれたなと思ひ

まだ死なぬ気なり保険を嫌い抜き

ハイヒールベビーはハズに抱かしとき

人に物やる快感が忘れず

キヤノン買ったで温泉へ行きたがり

姉女房職場結婚かと訊かれ

大阪市 武部香林

赤電話ここでも女喰いさがり

密談へ机の中が広過ぎて

お祭の大鼓をよそに眼を洗う

出雲市 尼緑之助

大和路の秋

これだけの紅葉へ客を待つしぐみ

神鹿と意識している顔を向け

府中市 弘津柳慶

おべっかか知ってて課長聞いて居り

素人の菊ヒヨロヒヨロと延びて咲き

堺市 吉田圭井堂

釣りに行く朝は誰にも起されず

育見法の規格通りで下痢続き

チャンバラに大事な矢立持ち出され

広島市 国弘半休

大の字になって寝る子の丸い顔

コスモスのどこか女性に似た育ち

先ず馬を射る手すっかり見破られ

豊中市 戸田古方

さからわず生きて蟻にもある不安

信用のおけぬところがおもしろく

のうれんを味うているいくらし

大阪市 市場没食子

路郎師御病臥

修繕にしばし手間どる羅針盤

義兄京大病院入院

病室で痛の話はみんな避け

正月が来るデパートの包み紙

耐焼けの首筋子にも嫌がられ

掛小屋の冬寒々とストリップ

西宮市 若本多久志

もう叱ってくれる人なき地位寂し

六十のおしやれネクタイ替えるだけ

脇息にもたれて呑むは只の酒

一号になる野心なく安住し

どんと胸叩いて屋台へつれてかれ

日曜の朝寝へ客はさばかれる

ホノルル市 内藤草一郎



近代化結局女に朝寝され

兵庫県 小西 無鬼

肩ほんと呼く課長で逆らえず  
借金取りへ五尺五寸を持てあまし  
北風に押されて行った屑喰い

下関市 石川 侃流洞

留置場に居ても小使要るとい  
迂かつにも総入歯なのを忘れてた

京都府 大鶴 喜由

ちりめんの端切れに残る過去の色  
給料日茶壺も一杯押しこんで  
エキストラのような焼香の列に着き

寸志にも会社は派手なのし袋  
粗茶一つ税務署お女将にとほけられ  
キャンプから急転直下式をあげ  
もうかつたらしい腹巻前へずり

鳥取市 河村 日満

食足れば鼻であしろう蛙切り

どんな子になるか教える方も知らず  
女でない女女をはがゆがり  
お正月吞ませるわけのないのも来  
めぐまれぬひがみは隅へ隅へ寄り

岡山県 福島 鉄児

孤児を招待したバスガイド美談に  
小春日の砂丘美談の娘と子等と  
ラブレター佐藤春夫の詩も加え

広島県 山田 季賛

年玉にミットをねだる孫となり

大分県 福岡 淡舟

よろめきの夫の愛へ戻りたし  
金が出来たら会うと云う便り

青原にて

洗濯機買えるまではと共稼ぎ  
雫まで飲みほし小銭で払う酒  
雑音につんぼの淋しさなど知らず  
下手なピアノをきいている鳥籠

くいの母孫より小さく老いたま

奈良県 飯降 白香

紅葉には遅し湯煙立ち上り

大阪府 山本 葉光

代表は私見ものべてまくしたて

山口県 長野 井蛙

子を生んで同権なんか云うとれず  
美容院主人は勝手口から出

カンニングむかしは博士もしたと云う  
天高く洋食皿に飯を盛り

老教師母校の町に病みて生き

長谷川 三司

あつさりと帰った本当のアルバイト  
ポーナスをねらう電化のたくましさ  
愛人と死の愉しさを語り合い

倉敷市 木村 千容

環境がいいと淋しい世辞をきき

呉市 林 野甦光

お神燈の下で待つ身の艶ふきん  
口実は妻の知ってる名を列べ

熊本市 有働 芳仙

振り上げて目にも見せるは蠅ぐらい

犬つれた朝の散歩をうらやまれ

おちついて歩けば間に合ったのに転げ

待っている女瞳ばかり出して冬  
株少し持てば社運のどうのこの  
冬の蠅ヘリコプターの様に降り

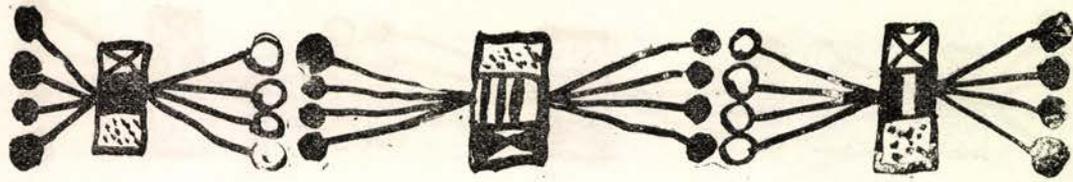
カリブソのすたれた髪をもてあまし

窓開けて課長の馬鹿とどなりたし

岡山県 直原 七面山

家元がくると前ぶれあつかまし  
世の例の姑におとらぬ母だった  
偽物とはいわず大事に保存しな  
家付の母が育てた娘じゃけんの  
精薄児うぬぼれだけはちゃんともち

立話へ夫三丁先を行く



日向ボコラジオ演奏背で書き

石川県 那谷光郎

求職の瞳にどの煙突も生きている

縁談へ娘の編針も来て座り

愚痴聞いて片手は猪口へ忙しく

石川県 野村味平

盲点を突いて法網あざ笑い

よろこびをみんなに分ける故郷の味

大阪市 木村水堂

アチャコに似たお父ちゃんが頼りなく

夫婦とはよいものと知る水枕

倉敷市 梶原一善

腹の立つ事もあろうにバスガイド

父ちゃんだの一声に家がしんとなり

片意地に保険屋とうとう匙を投げ

岡山県 田村藤波

女の子手毬を足でつく時代

お墓とは名ばかり石を一つ置き

岡山県 岡田夜潮

古ぼけた帽子にもとへ藏つとき

へら台へ向って女饅舌らない

岡山県 本田恵二朗

無愛想を売るわけでなし腕を売り

人を射るまなこを持って居たバタ屋

大阪市 真鍋一瓢

ママさんと呼んでと後妻真顔なり

表替えした部屋へカナリヤ置き変える

大阪市 後藤梅志

一本立出来るも弟子はすぐ思い

親孝行どころかゴルフ熱を上げ

近寄れば教祖のどこかボス臭し

草臥れた肩へ眠った首がのり

帝塚山こころは下手なテニスなり

万一という小遣いがへり始め

倉敷市 松村万古

通訳がいても力んだ声を出し

老眼鏡外して社長孫の守り

結局は国の財布に響くスト

見舞にも来ずに思っているそう

退屈を聴き手になってから分り

倉敷市 藤井春日

五十過ぎ今更拔擢でもあるまいて

一級酒にピース彼奴の生活の順調な

今日も又おから祖来じゃあるまいに

いけ好かん雨しよほ所望してニタリ

出張へオーバ線上げ新調し

妻の酌子等と戯る善良型

近道の赤線抜ける漏路笠

朴さんの郷愁アリラン口吟み

隙見せて四十男をもてあそび

株少し買うて勤務が落着かず

岡山市 津田麦太楼

頭痛膏よっぽど貯めたらしい後家

あんたもそうよと飛んだ蕨蛇

幹事にもなれば銚子を耳で振り

PTA教師のラブを汚ながら  
豊作のお世辞を親仁喜ばず

交番の灯と牡蠣舟の灯と交又

十二月己れの足にけつまずき

米子市 小西雄々

鼻声で呼ばれ社説を読み残し

尋卒と云う駅長の太い指

共倒れするまで新兵器を作り

岡山市 浜野奇童

大工して見れば木目が気に入らず

円満な方ねと妓惚れていず

子供会ここから楽屋と云う屏風

堺市 高崎雄声

身体だけ秀才らしくヒョロ長し

百姓へいい運動と御挨拶

お金さえ持つてくればと老いた妻

島根県 藤井明朗

新婚の朝寝近所の少し妬け

金が出来趣味だんだんに遠ざかり

岡山県 永松東岸子

村議選以来両家は物云わず

手真似して見せてつんぼに叱られる

くされ縁のように税務署から通知

草野球長春はいたのも混り

脚色をして地方紙は素破抜き

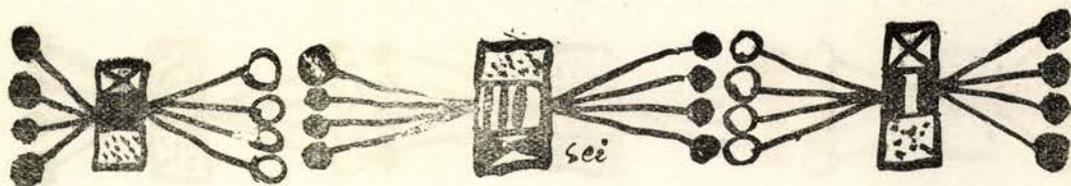
勿体をつけ女房に買ってやり

のんだくれの父が故郷にいる牧師

倉敷市 野田素身郎

彼女の前だが振り返りたい美人が来

無理すなと云うてくれるが休まず



夫婦とみられたのが彼女には不満

大阪市 山川阿茶

二又で折る柿フアウルの型で受け

大阪市 清水望峰

歌麿の絵へ妻君も目をそらし

大阪市 木村十悟

彩りを加えて教祖を大きくし

大阪市 伊達堰子

それなりに拾い屋便利な道具持ち

また家に居れん日が来る十二月

大阪市 不二田一三夫

妻ある日社説のような愚痴を云い

父老いて叱ってくれず昔ほど

あまりにも孝行にすぎ亮春婦

兵庫県 酒井ひか平

村社に詣れば逢曳を驚かせ

白黒をお見せしますと片山津

名古屋市長 尾越鳥

訪問の師の宅蛙なく蛙なく

一機完成上役だけの祝酒

神戸市 野村初甫

検便を二重三重包んで来

御恩返しする気葬式手伝うて

よろめきの話で昼を笑い合

宇部市 津秋六花

その筋じやなと思うハンチング

白衣着て稼ぎ背広で呑みが出る

大阪府 金井文秋

父さんが帰えり部屋中酒臭さし

石川県 中松恒雄

うずくまる様に吹雪の中に家

腹立てばラジオの声も喧しい

大阪市 児島与呂志

水黒くフト死神からのがれ

岡山県 野々口美舟

無心だけ云うた便りのちと淋し

責任の重いあなたへ頼りすぎ

神戸市 小浜牧人

大将と云えば社長の気に障り

酒好きの秘書で代理を嬉しが

角帽でチト照れくさい珠算塾

借りて来た選手が攻守とも目立ち

七五三汚さぬうちに脱がされる

西宮市 菱田満秋

再婚の年は忘れたおばあちゃん

月旅行などは願わじ治りたし

チャームする努力もせずに妬くばかり

兵庫県 前川左文字

炬燵から我家の電化始まりぬ

岡山県 池上知恵美

五人前に切って尻尾はいつも母

サイクリング時雨れる峠一つ越え

妻をまく夫婦が霧にへだてられ

大阪市 橘高薫風子

そう云えばそんな気もする借りが

檻の鶴又眼を閉ずるほかはなし

乳飲ます顔は尊し猫さえも

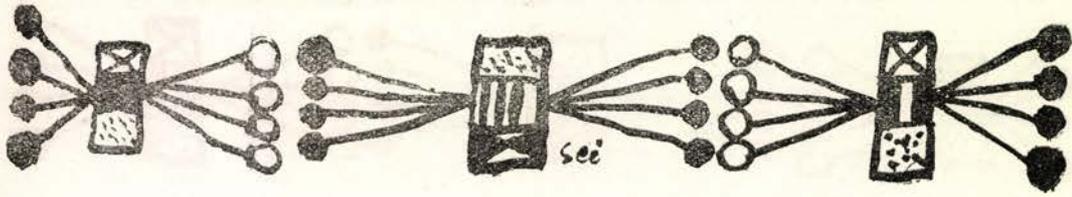
小松市 伊藤茶仏

世の中は厭しきものと決めて寝る

宿命へ素直になれず不眠症

妻の眼が間に合ってくれない医

大阪府 武部若菜



保線夫の息鉄くさく酒くさく  
釘をうつ音から舞台中継へ

下関市 中村九呂平  
出世したものだ彼奴に弟子がつき  
年上の弟子へ余分な気を使い

山口県 多田ほなみ  
力にもならぬの最後まで座り  
パチンコ玉あざける様に釘を抜けて行く

奈良市 宮口笛生  
秋の風サイクリングの下り坂

大阪市 西川 晃  
狂人の何も創造せぬ根気  
酔うた振りして友達に出させとく

ためらわず飛田を抜ける齢になり  
寝るとこが無い程店を拡張し  
霧の街乞食も詩情ある如し

カンニングさせて評判よい教師  
前垂れをして哲學の書に耽り  
肥えてるが取柄であるに瘦せたいわ

鳥取県 田中蛙眠子  
賢兄愚弟凡妹で仲が良く  
五千円をパチンコ屋でこまごうし

名古屋市 野田一念  
三度目の見合和服で頭も低く  
断崖の海は不気味に渦を巻く  
黒帯の猛者も口説きの手を知らず

岡山市 林 葵 丘  
結婚も間近カタログばかり溜め  
嫁きおくれママゴト淋しく眺めてい

神戸市 仲 どんたく

大安に開業した店もうつぶれ  
なれあいの様な感謝状いただきぬ

大器晩成型だったのに早死し  
白濁行

紅三点も積んで列車は湯の町へ  
あいあい傘今宵は年を忘れよう

平田市 久家代仕男  
御隠居が病み伸び放題の菊

北海道生れでさあと寒がり屋  
大阪府 本多省三

豊作へ寺も予算を組み直し  
宿題を明治の父へ見せに来ず

汚職記事なんかどうでもホームラン  
二階まで上げて隣の庭も見せ

守口市 大谷月都  
母親の気使いさえも五月蠅がり  
口喧嘩良人は遅刻となつたらし

同舟近詠

松山市 前田伍健

カメラ馴れ岸さん慢性笑いして  
言うことをきけと後ろに金があり  
先生のデモへ生徒のかなしい目  
売棄でなおるといふも幸せか

長野県 高峰柳児  
電化ただコンロとアイロンあるばかり  
来賓の音痴へ手拍子打ってやり

和歌山市 秋月宏方

春秋のいまだある身がバタ屋とは  
見合とは人生色気ある行事

落第をした経験もある社長  
村の娘も抜擢される様に嫁き

あごひげは伸られません生れつき  
次男結婚

新妻の匂いも混る部屋となり  
大阪市 石田沐天

リサイタル音痴の彼氏杖にされ  
快速で通いビルの地下を掃き

パトロールカー此処らで一つ鳴らしとき  
今治市 長野文庫

先生よ先ず鉢巻をとり給え  
秋暗れへ歩いて見度い御仏像

吊し上げて呉れませずソソ連切り  
今治市 月原啓明

倒れてもくれず使えませぬ土蔵  
抜き足で取るコスモスへ飛んだ球

儲ける店は警らに注意され  
新婚の映画のように抱だかれず

新児童ヴァイオリン・サークル

講師 麻生アートの  
奈良県生駒町本町二丁目一〇三番地  
生駒教室  
TEL306バン  
西宮市仁川町五丁目七番地  
くるみ幼稚園

★教室新設については新児童ヴァイオリン・サークル生駒教室へ御相談下さい  
TEL638バン甲

# 麻生路郎の川柳人的立場

— 十月号「一行詩人」に言及す —

高 鷲 亞 鈍

キリスト教と仏教は現代のなお二大宗教として二千年、三千年の歴史を持つている。われわれが現実の生きている人間の絶対価値をその二大宗教にみて、人本主義（ヒューマニズム）を生んだキリスト・イエスを詩人とみたら、人本主義を否定したサムボリス・シヤカは川柳人であった。前者は若く三カ年を愚かなる民衆と共に歩き迫害をもとめせず、己が理念を徹底せしめ、現世を諦めず神の国の実現を説きながら、荊冠を戴いて最期をカリバリー山上で十字架上の露と消えたイエスの精神は神の子としての自覚であり、しかもそれは根原的な詩人の宿命であった。後者の場合、印度の貴族・富有の家に誕れ、長寿を保ちながら、現世に於ける真諦を説くシヤカ・ムニ、は人間を純粋度まで徹底せしめたところの現実に於ける生命の否定であった。即ち人類史上二大先哲の歩んできた道とその説法は、前者は人間肯定故に現実否定となり、後者は人間否定故に現実肯定となる。

詩人柳はそれ故に肯定と否定の合目的存在としての川柳人のものでなければならぬ。

われわれは、従来考えていた川柳が、何故に俳句や短歌と並べて文学芸術と見做されず、単なる戯言としか思われなかったか、を考へるとき、われわれはそこに川柳が、人間性を否定して現実を肯定する以外、夢のカケラの一片だに見まいとする市井の川柳家によって為されていたからであった。其故に詩人柳は、詩人と川柳人のジン・テーセとして提起される限りは俳句、短歌よりも今や第一芸術として取上げられることになるであらう。

さて詩人柳は詩人と川柳人の共有的所産であった。但し詩人とか川柳人をこの場合、今一度再認識してもらわねばならないのは、単に詩を作る人間だから詩人、川柳を作るから川柳人と思つてはいけない。そういう職業としての詩人・川柳人を指しているのではなく、人間性に於ける詩性（ハイプロウ）と俗性（フウプロウ）の精神（エスプリ）をもつ人間を抽象して言ったまでである。即ちここで川柳人を定義づけるなら、詩性的人間実存を言うのであつて、その所産が詩性的川柳であり、つめて詩人柳といふのであ

る。故にわれわれは川柳を作る前に人間である、と言われていることよりも、川柳を作るために詩人であらねばならぬことを提唱せざるを得ないのである。換言すれば詩性的人間を肯定すれば、俗性的人間は否定される立場にあつて詩人柳は成立するのである。われわれはその意味に於て従来の川柳は俗川柳・古川柳の否定面に立つことになる。それはキリストのヒューマニズムによる現実否定の謂にはかならない。

ここで私は麻生路郎師が「川柳雑誌」昨年十月号の巻頭言「一行詩人」を書かれたことに言及する。川柳は、一呼吸の一行詩に過ぎない。いずれは滅亡する。それは間違いない事実だ。しかし私は言う。その短かい一行詩に私のいのちを捧げつくして、海のない魅力を持つことが何故いけないのかと反問したくなるのである。——（傍点筆者）

行詩が川柳であるという逆説が成立して、それは詩と川柳と同義語に解されることは短詩が川柳であるという錯覚に陥入ることになる。もともと路郎師は先に述べた意味に於ける詩人であり、その日暮しの家にキリストさまが立ち「といふ句を二十数年前に創られた如く、キリストの宿命的な詩人（ヒューマニスト）であつた。彼は主情的にマンチシズムを川柳界に樹立せしめた所謂詩人柳作家の川柳人であつた。故に彼は根源的な詩人性を、「永遠の旅人と云うのは旅人その人の夢でしかない。」と自らの詩人の宿命を告白している。しかも「その短かい一行詩（詩人柳）に私のいのちを捧げつくして、海のない魅力を持つことが何故いけないのか」といづれは滅亡する一行詩にいのちを捧げつくして、海のない魅力を持つことに対する反問を我と我が身に投げかけているのは何故であるか。それは従来の川柳概念である俗性川柳を現実の肯定に於て見、その不信を訴えているに他ならない。或は俗川柳は、滅亡し、忘却のなたへ押し流されるだろう。何故なら俗川柳は、それ自体が散文（非詩）であり、非生命的現在のなもので、木石とも山上の墓碑ともされる空間的存在であるからである。路郎師のあの「一行詩人」にみる痛切極まりなき悲壮なまでの自虐は、遂に自己の中にある川柳家と川柳人との観念の相剋であつた。

路郎師のいう一行詩は、詩人柳作家（川柳人）として捉えて然りと考えたものに、題目に明かに明示した一行詩人という詩人的立場をとらずして、俗的具体的人間である川柳家の俗川柳乃至は古川柳の観念によって捕えられた一行詩であつた。但しこの場合の一行詩は詩ではない。川柳は一行詩でも短詩でもない。絶対に詩ではなく、詩と対向する散文であり、強いて言えば散文の短句である。ここではっきりしたことは、川柳人は、宿命的詩人が板初めに着色した川柳を皮膚面に塗った実存の人間であつた。宿命的詩人は現実に生まんが為には何らかの着色をしなければ生きていけない。現実が散文であり、人間も亦散文である。散文はバラバラで味気なき川柳である。人生が悲劇になるも喜劇になるもそれは詩人の内部に点滅する哀愍である。麻生路郎師の孤独は詩人の根原（オリジナール）からきたもので「妻よ子よバラバラになれば浄土たり」は正に詩人柳を約束づけるものであつた。

車

## 福壽司

心斎橋筋大丸前  
電話③三三四番



かがやかしい新春を迎えて、また「今年こそは」のスタートをきることになりましたが、今年こそは、ぜひこれを実行してみたいことも、柳界の諸大家にうかがってみました

編集局

# 今年はずい

# これを實行してみたい

—— 自分に対してまたは柳壇に対して ——

## ○ 麻生路郎

川柳の立場から庶民の文化昂揚に一段と微力を傾倒したいと考えている。そのためには短詩型文学

の交流によって各人が基礎的なものを把握するのが先決問題だと考えているので、柳書の出版への協力、講演会の開催、作家の作品展

等による啓蒙的な運動を活発にしたいと思う。私個人の問題としては今年はずいとめて旅がしたいと思

っているが時間がゆるせるか何うかは疑問である。

## ○ 山路関古

私どもは古川柳研究会という会を作っているが、その会の仕事と

### ・ 回答到着順 ・

しいので今年は何句方面でも少し勉強したいと思っている。これは極く新しいところで行きたい。どうかよろしく。

## ○ 船木夢考

従来の一、三句以上作句を今年から、一日五句以上の句作の方針に改めたいと思っています。そして今後は更に推敲に一段と努力したいと思っています。従って一生のうち一句でもよいから自信のある句を作りたいと念願しています。

## ○ 北村白眼子

永年の念願だった小樽川柳社、旭川川柳社の訪問を昨年果し、両吟社社人諸君とも親交を得ましたので此機を逸せず、去年から交流ある北見川柳社、釧路川柳社も誘って当函館と共の五市柳壇手をとり合っ

是非実現させたいと思います。私個人としましては三十年来の詠草から抜萃してささやかなものでも「句集」を刊行したい存念であります。

## ○ 愛媛藝術祭参加

前田 伍健

一、四国川柳大会と名刺も絶景の別格本山興隆寺(愛媛県周桑郡丹原町)で開催の口火を切り本年は第三回になる。名実共に四国のみでなく近畿或は西日本の名物大会たるべく先ず足の便利(バス増発)宿泊の便利(簡易・安価・気楽)を地元及びお寺側と協力して成功させたい。

白紙中で  
岩見めて親類にも送る

先請 松前屋昆布



大阪・心齋橋  
電話 (75) 九〇八四番  
三四八四番

川柳大会へ健康と経済のゆるす  
限り出席してみたい。

一、老体のカヨリーとしてうまい  
ものを今迄より以上に食べた  
い。(豚カツ、車えび、名物う  
どん、そばなど)そして精力を  
養い、一日十句、年十句、一生  
通して十句の川柳目標を完達し  
たい——てな「みたい」ですが  
どうなるかお笑い下さい。

### 堀口塊人

昨年からのびのびになつてい  
る食満南北翁の句碑を建てることと  
遺稿日記等を整理する事より考  
えて居りません。

### 石原青竜刀

(人民川柳社)

#### 一、「人民柳穂」の刊行

戦後人民川柳社で全国柳誌その  
他から採録し続けてきた「人民  
的」「社会詩的」な作品(われわ  
の信ずる正しい川柳のありかた、

ゆきかたの方向を示すもの)の第  
一集とでもいったものを、なんら  
かの形で公刊したい。この年内に  
出来るかどうかかわからないが、と  
にかく目標としてやりたい。  
二、革新的な川柳性の探求

単なる短詩を川柳とする人々の  
反省を求めると併行して進め  
てゆきたい。

### 東野 大八

仕事と家事に逐われ作句もロク  
に出来ませんので、今年は少く  
も力の入った作句に入りたいと思  
います。毎年元旦になる度に何か  
と今年こそは——と思うのです  
が、生来のものぐさとやりっぱな  
しな性分が邪魔になつて——。い  
ずれにしても句を作るということ  
が柳人本来のものですのに、改め  
てこう決心するというこの間抜  
けさ、凡慮の決心を自嘲するのみ  
です。

### 相元 紋太

毎年何かと思ひながら思つこと

ならず終る。今年は、実行可能  
のことを計画している。それは、  
自分の腹に溜つた川柳穂を、洗い  
浚い吐き出して終うこと、これな  
ら出来ると確信を持つ。これが出  
来ないようなら生きてる甲斐がな  
い。今年のふあうすに毎月書く  
つもり。柳界的には私に何も出来  
ないので別に何を実行しようとも  
考えていない。従来通り忠実に働  
くだけである。いい考えが流れ  
ば、その時に実行。兎に角生きて  
居りたい。

### 森脇 匿香里

少し大それた希いでございます  
が、私がかねてからこれではけれ  
ばと考えているような句集を個人  
又は数人で出して、ひろく世に問  
うてみたいと思つております。併

し今年もまだ実現はむつかしいよ  
うで、おはずかしい次第でござい  
ます。

### 中島生々庵

○私個人——作句に際して真剣に  
取り組むと云う事が第一の条件で  
あると同じ様に、選者を仰せ付か  
つた場合、自分の全能力を傾けて  
一句一句に対して努力すべき事も  
論を俟たないところである。とこ  
ろで私は私の力の至らなさに没句  
にしたであろうと思われる句に非  
常に愛着を感じ、昨年頃から私が  
没にした句箋は事情の許す限り会  
場から頂いて帰り、翌日、もう一  
度読みかえして見る。それから心  
ひそかに供養の意味を込めて焼き  
棄てる事に行っている。今年は是非  
徹底して実行して見る念願であ

## 今年やりたい 事は

### 川上三太郎

沢山あるが、取りあえず小生の  
第三目録句集「孤独地蔵」の刊行  
に傾倒する。そして出来れば秋に  
は北海道の奥地を旅したい。希望  
としては半年ほど中国に渡航して  
生活したい。

川柳の  
のびんびん  
と  
祖母に母



本店 戎ばし筋 電 ④ 3452  
支店 阪神のれん街  
近鉄のれん街  
地下センター

る。

○柳壇——戦後は終つたと云われ  
る今日此頃である。「川柳の社会  
化」の第一の旗印として路郎先生  
の玉句「ふるくとも僕には仁義礼  
智信」をあらゆる機会に宣揚して  
ゆきたい。

### ○ 柳界にも

#### シンボジウムを

前田雀郎

月々の柳誌に発表され書論文や  
考証には立派なものが尠くありま  
せん。にもかかわらずこれは極く  
少数の人々の眼に触れるだけで終  
っている現状を悲しみます。この  
ことに鑑み、川柳界でも年に一回  
くらい、全国各吟社の代表による  
シンボジウムを持ち、研究の発  
表、或いは討議等を行うことが出  
来ましたら、柳界の向上と発展に  
どんなに寄與することかと思つて  
います。しかもこれは、川柳とい  
うものを対社会的にも大きく打出  
すことになりましょう。この年は  
そういう機運を是非つくりたいと  
願っています。

### ○ 浜 夢 助

川柳は人間詠歎であるとも亦、  
川柳は詩であるとも言われるが、  
どうもしっくりしない。従来三  
要素、此も古く充分でない。俳句  
に於ける花鳥風詠の如く簡明な定  
義がわが川柳にも欲しいものだ。  
誰か今年あたり万人の納得の行く  
ような川柳の定義を確立してくれ  
ないだろうか？ 万言を要約して  
簡明に……

### ○ 実行して欲しい こと

#### 大島 濤 明

是非実行したいことは幾つもある  
りますが、今の私には到底実行力  
が無いので、他の有力なお方にお  
願ひして実現して貰うことを念願  
します。

△日本史伝川柳狂句の出版、これ  
は故岡田三面子博士の著述で終戦  
前故大曲駒村氏が謄写版刷で刊行  
されたもの、日本の歴史を詠んだ  
川柳を基として其の史実を懇切丁

寧に書かれたもので、とてもよい  
参考書です。誰かのお力で出版さ  
れんことを切望します。

### ○ 三 條 東 洋 樹

不言実行。不偏不党。  
とも角私は私の信念に従つて進  
みます。

### ○ 清 水 米 花

川柳思潮社

川柳は詩である。然し詩は川柳  
ではない。このケジメをはっきり  
させたい。この事は川柳をはじめ  
てより四十年になるうとする私の  
頭初よりの念願であり、今年に限  
ったことではない。

依て以て、本年も亦作句第一主  
義で行く。

### ○ 西 尾 菜

楽観すれば悲観する。悲観すれ  
ば楽観する。良いと思えば悪い。  
悪いと思えば良い。雨と思えば天  
気。天気と思えば雨。期待すれば  
はずれる。期待せねば成就する。

どうも私は天の邪鬼で四十幾年今  
尙計画樹てたり、期待しない事に  
している。その反動が余りに大き  
い。天の邪鬼は天の邪鬼らしい回  
答ですみません。

### ○ 鈴 木 可 香

名古屋川柳社も満二十五周年を  
迎えることになるので、吟社とし  
ては記念出版物と、中京の三先輩  
大吉、映絲、桂雨氏の合同句碑を  
献じ（建立）たいと思う。川柳に  
関しては売れる作品をつくること  
と、百貨店へ進出して展示会の機  
会を多くつくり、一般社会人によ  
り以上川柳作品を認められるよう  
努力したい。最近の中京柳壇は低  
調気味で、各吟社各会とも例句会  
の出席数が尠いのに對して新人を  
誘導して出席率を向上させてみた  
と思う。

以上主幹旭映氏に代つて私から  
お答えします。

### ○ 北 川 春 巢

路郎先生からいつも云われてい  
て、出来なかつたことですが私は  
今年こそ医者に関する句を集めて

# 神経痛・リウマチに...

西独クノール社より新輸入



オサドリン錠は西独クノール社が多年  
研究の結果、新発見した神経痛・リウ  
マチ治療剤です。その作用は確実に  
胃腸障害などの心配がありません。  
(10錠) 350円・(20錠) 650円

# オサドリン錠

見たいと思いません。テキストは何と云っても先ず「柳樽」からはじめたいと思えます。これは誰でも手に入れられる岩波文庫がありますので、人々の参照にも便利であると考えられるからです。「柳樽」からは他の人々がかなり発表しておられますから。次には手許にある句集「旅人」や「福寿草」や「私産」などものぞいて見たいと思っております。

### 「考えます」

#### 岸本水府

○「いいたいことはあした言え」ということを守っていたら何にもならぬ柳界。  
○いいたいことを今日言っても何にもならぬ柳界。  
○今年「考えます」

#### 櫻井六葉

△今年出せるかどうかわからぬが、自分の句集を出したいこと。  
△川柳を見ている社会の眼、作っている川柳家の心組、ともにまだ間違っているところが多い。これ

をだんだんによくしたいこと。

#### 若本多久志

それは私の数多い夢の一つ——「親子の至情を詠んだ句集」刊行の念願である。汚れ多き現実の中に只一つ、心打たれる崇高なものは親子の情愛ではなかるうか。折にふれて、川雑第二四〇号から昨年十二月号までの中で、これ等の句を既に式千句余り頂いて目下編集集中であるが——巻頭には路郎先生の御序文と「俺に似よ」の句を頂いて、四月頃出版したいと思う。——そして丁度廿五年前、夭折した長男、私の人生観に新しい灯を点してくれた亡兄の霊前に供養として捧げたい親心である。

#### 伊志田孝三郎

振り返えればよくも歩み続けて来たこの一筋道だと思われます。殊に年々と初春ともなれば其の感が深いのは私一人ではありません。それを考えると、今年は是非これを実行してみたい、ということとは過去も今もこの先きも、どう

ぞして此の道が良き指導者に依って栄えますように。その念願の外には有りません。唯わたくしは、

一番人間くさいのが川柳だと言わずに、人間の香り高き川柳と批判される様に成り度い。その思いでいっぱいです。お人好しいは順でもいろはのい。

### 金泥集のこと

#### 麻生葭乃

私の担当している金泥集の句は粒揃いでありたいと思っている。似たか寄ったかの句が数句並ぶよりは、洗練された一句が光って欲しいのである。だから大抵一人一句の見当で選んでいる。たとえ入選価値はあっても其人としてバツトせない句は捨てている。どうせ一句しかのらないのだからと云って柳歴のある人がええ加減な句を詠むのは止めて欲しい。それは金泥集のねうちを引さげることでもあり、女性の頭の悪るさを公開することにもなるからである。今年こそは頑張って貰いたいものである。

諸大家がこのようにご決意をのべられました。柳界の指針は、いづれも輝しい本年の東方を指しておられます。われわれも今年こそは、川柳の旗手たらんことを希って「いのちある句」を創りたいものです。——編集局

謹賀新春

中島生々庵  
中島とし代

大阪市南区鰻谷  
仲之町二〇番地

愛酒家も  
**これ** 総合保健薬  
**で安心!**



肝臓・胆嚢・胃腸を強化し、疲労を回復する

**NESTON  
ゴールド**

30錠 200円  
100錠 500円

NEG12

田辺製薬

# 川柳家の二十四時

諸大家の真夜中の夢から、晩酌の跡子の数や食卓の隅の中まで覗かせて頂いたら、諸先生の生活断片史として後世これが貴重な文獻となるかも知れない。  
—編集局

豊中市 戸田古方

(18)

- ★一時——ねむっています。夢もみず、ねぐえりもせず。
- ★二時——よくねむっています。
- ★三時——まだ眠があきません。
- ★四時——自然に呼び起されて、厠へ立ち、そのまま机に向います。思考、推敲には最適の時間です。
- ★五時——季節によりますが、窓を開け放つと黎明。楽しい一日の始まり。
- ★六時——机に向ったまま尙三十分。七時までに食事。
- ★七時——頬べたにキスして、手をふり合って出発。十五分乗車。大い腰がかけられます。
- ★八時——学校着八時半。四十五分朝礼。誓込歌のテープレコーダーにスイッチを入れて、合掌——礼拝の司会を放送室からします。



- ★九時——一週二十二時間。授業にいたり。
- ★十時——業の時は高座に上ってアベック、男と又女と。ブラッ
- ★十一時——たつもりで熱演。手
- ★十二時——空きの時間は調べものや、雑談やら、
- ★十三時——クのゴヒやぜんざいで歓談。
- ★十四時——風食十二時四十五分
- ★十五時——パンかうどん。案外
- ★十六時——川柳の会合やクラブの病院長が、夜の幕を裂いて迅速
- ★十七時——聞えます。
- ★十八時——再び眠ってゆくのです
- ★十九時——浅い睡りに落ちています。
- ★二十時——再び眠ってゆくのです
- ★二十一時——再び眠ってゆくのです
- ★二十二時——再び眠ってゆくのです
- ★二十三時——再び眠ってゆくのです
- ★二十四時——再び眠ってゆくのです

されます。

★十六時——補習をしたり、図書室にいたり。

★十七時——下校。アベノ橋まで

正誤  
前号印刷所の手落ちで布部  
幸勇とあるは布部幸男と訂  
正。

時前帰宅。

★十九時——ゆつくり風呂に入り

ちよつと飲んで、あとは大いに

食べます。かつての二十五貫に

は及ばなくとも、必要にして、

且つ十分な美食。

★二十時——家族とお喋り。

★二十一時——気がむけばラジヲ

をきき、スケッチブックに手あ

たり次第に写生したり。車中や

一日中に拾った句叢を整理。

★二十二時——ねまに入ると、す

ぐにねむります。ねつきよろし

★二十三時——ね入りばなによく

寝言をゆうそうです。ロンドン

和洋菓子

朝

日

堂

大阪南区市電戎橋御堂筋角  
TEL (75) 7284

東京都 清水米花

風のよりに過ぎます。

★四時——浅い睡りに落ちてい

★五時——再び眠ってゆくのです

★六時——再び起床、この時又安



食も淋しい限りです。

★十九時——依頼された原稿のこ

と、作句のことなど、出来るも

のから片付けてゆきますが、病

後疲れが早いのを警戒しながら

ですから、

★二十時——なかなか思うように

捗りません。

★二十一時——何もせず、ほんと

にぼんやりと、縫い物の妻の手

先を見ている。こんな時が、今

の私には一番幸福感を覚えま

す。

★二十二時——ラジオのスイッチ

も切つて、今日を閉じます。

★二十三時——今夜こそうまく眠

りたいナと思いい目を閉じます。

★二十四時——落葉が時雨のよう

に聞えます。

らでしようか)——定まって居

ません。

★十九時——

★十時——

★十一時——九時から家業の古本

屋の生活が始まるが、金になら

ない色んな仕事を仰せつかつて

居るので働らいて居るのやら、

遊んで居るのやら分らぬ生活を

繰返して居ります。

★十二時——風飯。

(問 風食には一本欄けられま

すか、どんなものが、お好きでし

ようか)——好き嫌いはありま

せん。

★十三時——

★十四時——

★十五時——(問 おやつは如何

でしようか) 食べません。

★十六時——

★十七時——夕刊が来る時刻です

★十八時——夕飯(薬用として少

量の酒をのむ)

★十九時——

★二十時——

★二十一時——

★二十二時——平凡な一日が終り

ます。

★二十三時——(問 読書、お仕

事と貴重なここ教時間をどう御

使いですか)——手当り次第何

でも読み、興味あらば二時間ぐ

らい、気分進まねば十分間で寝

る。

### 長野文庫

今治市

ながのぶんこ

★七時——睡りに陥ちます。

★八時——この頃、副寒むで、

★九時——やつと床を這ようかと

考え。

★十時——三年に亙る療養生活で

身体に対する自信が薄れて、従

って寒さにも至極オク病になっ

てしまったようです。

★十一時——朝、風兼ねた食事を

摂。(これは一日二食という

事(す)

★十二時——食後一時間何もせず

何も考えず。

★十三時——一時より十五時迄が

一番楽しい時間、それは川柳に

対する種々(事)に費やす時間だ

からです。

まもします。

★十六時——風呂に行く、この間

一番楽しい時間(あるのです。

★十七時——ニュースを聴いて、

この頃はとも楽しい事が少な

いナと思ひます。

★十八時——夫婦二人(きり)の夕

時

★一時——(問 もうお寝みだし

ようか)——寝て居ます。

★二時——(問 お仕事の最中で

★三時——(問 洗濯に

★四時——(問 洗濯に

★五時——(問 洗濯に

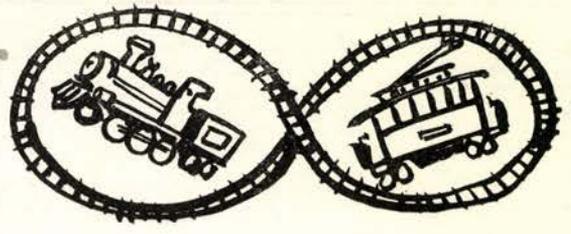
★六時——起床、夏。

★七時——起床、冬。

★八時——新聞読んで朝飯。

(問 朝食はパン食、米食どち





# 句評リレー

岡山県 出雲市 鳥取市 石川県 大坂市 真鍋一瓢

山上千太郎 河村日満 尼緑之助

久米雄氏提出（九月号川柳塔から）

三の宮もう降りますと云う 姿勢 千容

久米雄 汽車でよく見受ける風景を三の宮で表現している点巧妙である。

緑之助 軽いスケッチでたしかにほほ笑ましい句だが佳句とは言いがたい。

日満 私も頂きかねる。

千太郎 ここに掲げられる句は佳句推せんというよりも、句評することに何らかり課題を提供するものでありたい。この句、その意味からしても、緑さん、日さんの言葉のようにこれと云った発見があるとも思われぬ。だが、ここに三の宮ときっぱり明示して次の大坂を暗示させたところに作者の意

志があつたのかも知れない。

一瓢 千太郎氏の御意見私も同感。特に大阪暮しの私達であれば「もう淀川やな」位いで降り支度にかかろんだが、淀川と三の宮との時間のずれが、ずばり田舎の人をはつきりさせている点老巧だと思ふ。

久 田舎者の姿勢に興味を湧いた。緑 要するに写真であつて作意も何も無い。秀句とは云えないがまああと云つた程度の佳句。日 この句私には物足りない（勿論佳句としてのことである）。千 一瓢、久米雄両氏の「三の宮は田舎者」は的を云い当てている感がある。

久米雄氏提出（九月号近作柳樽から）

人間も牛も田植の済んだ顔 旭童

久 この句はやはり百姓をして来た人でないかと本当の味はわからないと思ふ。広い田の中で働いていたのは全く人間と牛だけであつた。雨の日も照りつける日も黙々として、働き抜いて来た苦勞と安心感、ほつとした時全く嬉しく有難いものである。牛を見つめる人間の顔に慈愛の笑みがあふれている。

緑 キョトンとした牛の眼がうれし。

日 ほつとした感じはよく分るが、私には普通の句、所謂平拔程度の句としか頂けない。下五落んだ顔から後、何かありそうな気がして物足りない方が強い。

千 私は日満氏の意見に共感です。句を通じて流れるセンスはどこちらか云えば古い。しかし頂ける句であり嫌な句ではありません。一 この作者も老練だ。何でもない様な事柄をうまくキャッチして、纏め上げてゐる、がそれだけで、大した迫力もなくますます無難な句と云うにとどまるか。

久 みなさんの評につきては、期「只歩くだけで牛の農繁」の句が頭に強くこびりついてゐるので、前評以上に出ない。

千 再度奮闘しました。しかし前に述べた以上の躍動この句から得られなかつた。

緑之助氏提出（九月号近作柳樽から）

代仕男 抜けする

緑 用語・技巧等にこなし切れないない憾みがあつて名句とは云われないが、その憾みがこの句の場合却つて句を生かしている。この作者には、一般に鋭さとか巧緻さとか云つたものが少なく、素直なスケッチが多い。

久 家中はいいとしても気抜けするが説明に終つてゐるうらみがある。

緑 その通り。

日 亡くなられた後の淋しさが下五「気抜けする」になつてゐるので、此の句の場合これでもいいのではないかと云つてそれを佳句と云つてゐるのではない。

千 私も気抜けするこれで結講だと思ひます。久米さんの説明するうらみはあつてもこの結語あつてこの句が生きる。つまりこの句の生命が「気抜けする」にあると思われまます。ガミガミ屋さんの亡きあとの一家の雰囲気がよく現れてゐる。今更にガミガミ屋さんを懐しむ人さまさまの思いが、気抜けの中に漂う感が深い。

一 家庭の状況はよく分るが、やはり私も下語「気抜けする」はどうも気にかかる、今一歩だ。久 気抜けするの叙法に物足らぬうらみがあるが、別にこれでいけなうと云うのではない、ほくに云わすればもっと良い句になるのだと願うだけだ。

日 今一歩と云われると肯定せざるを得ない。

千 気抜けするは平言俗語です。

物足らぬ日常語かも知れぬ。その物足らぬ中に本当の気持が汲み取れます。

千太郎氏提出（川柳塔から） 旅だから妻も同じものを食

光郎

千 革新とか新奇なものや云うねらいならこれは素通りさせた方がよい。この句から私の求めようとするものは、善良な生活にしっかりと根を深めた不易感、そしてどこまでも続く、しみじみした伴侶の愛情にある、この日の妻の手はぬかみそ臭くない。

久 同じはおなじじ意味だと思ふ、同じには御馳走であつて、平素は家にはいますいも少を喰べていても、旅に出ているから主人と同じ御馳走の前に坐つてゐる、妻のうれしい顔である。ほくも職掌柄旅の句が好きだが、この句も好きな句の一つとして記録しておく。

緑 その愛情は分るが、この句には贅否両論ありと思ふ、わかつたようでわかりかねるところがあるようだ。

日 古い川柳家が見た場合、たしかに久米雄氏の云つておられるような妻を想像してくれるだろう。私もそれに加えて酒の一本も添えられてと空想することまで出来る。しかし、中七あたりを讀み返して、私ならここを何とか等と考えたりしてゐる。

一 私にはどうも頂けない。私が受ける句意から言つてもうそんな時代じゃないのではないかと。拙句「稼ぐ夫忘れては居ぬ刺身皿」ま

ずいので読んで貰って理解出来ないかも知れないが、私の感謝がある。所がこの句ではそれ位の事はあたり前でもむしろ強要しているかにさえ見えて、夫のタイラント振りがあまりにも曝け出され過ぎている様に思える。

久 時代は変わっているかも知れないがわれわれの時代の夫婦としては、うなずけられ、夫婦愛のじじみ出ている句、うらやましい句だと思ふ。誰かの句に「一人来て二人で来た波の音」というのが有るが、そう云う気持になつていてもなかなか実現出来ないのがわれわれの生活ではなからうか。  
緑 「好みに合う」「好き好き」ということも有るが、依然としていただきかねる。

日 落ちついて味えばますますむつかしくなつて来る句のようだ。私より若い選者には抜け難いものだらう。

千 この句には家庭の夫婦の日常が大きく省略されている。男は刺身、妻は漬物というのではない。旅の膳で夫はつくづく思ふ。家庭での妻の毎日の台所、苦勞を、食べ物に何かと心を配ってくれる心情を、そしてせめて月一度でもよいから、そうした心勞を煩わさない旅の膳……温泉へでも……に坐らせてやりたいと思はしらせている。これがこの句の真意だと私は思ふ。「旅だから妻も同じものが喰えてではない」  
一 夫婦の愛情はよく分る。だが

旅だから同じものを食べと云う以上家庭へ疑問を持つのに不思議はない筈だ。旅でなけりや同じものが食えない家庭じや女中でも長続きしないんじゃないかな。  
日 満氏提出（九月号近作柳樽から）

紙芝居オプザバーの位置にたち 抱亭

日 子供と一緒になんて童心にもなれず、それかと云つて、まさか鉛を頂戴して真正面からの観覧もくすぐりたい、そんなこんな複雑な点を「オプザバーの位置」にまとめた手腕をほめたい。紙芝居は古くとも矢張り時代は移りつつある。

久 オプザバーの位置は面白い表現だと思ふ。熱心の気持程度は幾分子供と違つかも知れないが、やはり紙芝居は見ているのである。  
緑 日満さんの評につきてはいいいい句だ。

千 それ程、感銘深く訴えて来ないので困つています。「オプザバーの位置」の表現のおもしろさは共鳴しておきましょう。  
一 面白い。子供の世界へ暇つぶしの大人をあしらつて、ほほ笑ましい情景だ。  
久 オプザバーで生きている句だ。  
日 千太郎さんに共鳴して貰えないのは残念だ。  
千 表現法に苦勞の跡が見えて好感が持てます。

一 表現法とか何とか案外苦勞してない、街角の点描がすらすらと出て来た、話言葉同様な即吟風な句ではないか知ら。  
日 満氏提出（同月号近作柳樽から）

喧嘩する言葉もあつた京都弁 水泡

日 京都に喧嘩言葉があつたと別に驚く事はないではないかと、云われそうだが、それがそうでない所に、此の句を取り上げた原因がある。我々にはあまりにも「そぞすえ」の京都をのんびりした国に教え込まれて居る。いや信じさせられ過ぎて居るようだ。センスの鋭さが捉え得た句であると共に京都弁以外でこれだけの味は出ない。

久 けんかをする時の京都弁は僕には知らない。が、確かにその時の言葉があるのだと思ふ。そうなる、それに気がついた作者が驚いていることになる。おどろきの場合は言葉の方がはつきりするのではなからうか。

緑 私は「が」より「も」がいいと思ふ。京都弁だから生きているとは、日満氏同様、佳句。  
千 これはよろしい。原句のままで頂きます。一応は優雅だと印象づけられている京言葉、それが喧嘩ともなると弁は京言葉なりに喧嘩に適した綾が織り成されるかと思つと甚だ愉快になります。  
一 下五京都弁を、京言葉としてのいいと思つが、中七の言葉もの

言葉が、邪魔つけどだし……。久 「も」でもいいが「が」の方がまたいいと思つただけだ。  
緑 京言葉の方がいいでしょう。  
日 確かに京言葉の方が優雅さを増すようです。

千 私には京都弁としての感じ方がある。しかし京都弁を知るかとなると、言をさし控えねばならない。

一 瓢氏提出（十一月号近作柳樽から）  
ナフタリンの様に母親小さくなり きさ子  
一 ナフタリンの様とは一寸ひどいなと思ふ。いたずらに古い道徳を押しつけて若い世代を萎縮させてはならないが、もう私達の知らぬ間に新しい時代はこう変つたのだらうか。今少し穏当な比喩がなかっただらうか。

久 梅干婆さんとは聞いたが、ナフタリン婆さんとは少しひど過ぎる様にも思われる。けれ共これは主観の問題で、作者がそう考えたと云えば、それまでである。

緑 作者は決して、母親にひどく当っているのではなく、無言の底に、涙つもらせた、愛情、感謝をこめている。ヒドイ比喩ではない、ヒドイ様に受け取れるかも知れぬが、この句ではその逆である。ナフタリンとは矢張り女性ならでは見つけられぬいい句だと思ふ。  
日 私はここまで働いて来た母親への感謝心がこの句を生んだもの

と解している。「ナフタリン」が悪かつたにしても結びを「給い」あたりで止めれば、誤解される事のない句に仕上がつたと思つ。  
千 母の底知れぬ愛情を、ナフタリンに比喩を求めたことは妙手と云つてよく縁さん、日さん説に同感です。ただね、結語「小さくなり」は日さんの意見も含め、練り直していただきたい。年を取れば小柄になるのは解りますが、それにしてはナフタリンが小さくなるのに掛けているようで気まずいと云うのが私の考えです。

五氏が二回宛目を通されたので約二カ月間の日数を費やした。諸氏のご協力を感謝する。本稿担当者は真鍋一瓢氏でした——編集局

ウロコ印 武田薬品

**体力をつくる**

強力…総合ビタミン剤

**強カパンピタン**

はかにミネラル入M

錠(30錠・100錠) 大阪市道修町 武田薬品



麻生路郎選  
北川春巢選

不渡りにしては立派な社長判 西宮市 野呂 鶴汀

貴婦人に似て居て菊の美しさ 同

行く当てのないのが釣も横に来る 同

琴の音で師匠は恋をもう見抜き 同

着崩れを直すに有料トイレット 同

義理だけの席は気楽な隅へ座し 同

宝 簞一枚買うも十二月 同

豊作へ地蔵のよだれ掛けを替え 岸和田市 内藤きさ子

豊作の村へ菊人形のピラ 同

タコ焼きを左で貰う風の糸 同

恋人のストイ虫歯に気が滅入り 同

女賢しうして庖丁の錆びたまま 同

真相を知っているからまずい酒 同

インテリは踊らず写真ばかり撮り 岡山市 宗高矢寸志

本妻の忍耐頭痛膏を貼り 同

女房のくちばし話の腰を折り 同

農繁に使えるように 式を挙げ 同

別居して見るかと言えば涙ぐみ 同

老けたでしようと言えどく聞き 同

酒ちびりちびり再軍備がお好き 大和郡山市 藤田 凡々

酒が好き菓子が好きなり損をせず 同

汽車賃の事は忘れた特価品 同

知性とはさんまぎらいの子に育ち  
歌手だから顔の批評はやめてほし  
虎の威をなくし課長のやめて行き  
月あかりに米を磨ぐ不倖せ 宇部市

初恋のささやき蚯蚓の唄も聞き 同

妥協のない男で秋を淋しがり 同

勤続三十年平社員として万年青 同

死刑囚宗教家になり歌人になり 同

蜜柑箱父も老いたと言う便り 同

物干の月が冴えてて恋は来ず 大阪市 板東千代美

待ち果け腹のたたないひとを待ち 同

逢いに出る白粉洗らう歳になり 同

逢いたさを糸に乗せたら泣りて来た 同

燃えるだけ燃えて女体は歳をとり 同

日曜の手を当にして稲を刈り 岡山県 杉本たつよ

嫁に肩たたかせ若い日の自慢 同

湯上りの壁に我が背のまがり知る 同

耐えられぬ氣持鼻唄なぞ唄い 同

エスカレーターにも乗るる氣母を 同

衛星も二号になれば犬を連れ 高知市 須藤 俊江

好きなもの聞えば貴女の次野球 同

祈とう師の汚れた足の裏を見た 同

人間を尻目に犬の肉を買い 同

泣いても女蜜柑を口に入れ 同

大学を出てマイジャンの腕の冴え 岡山県 福田白面子

誘わぬと後がうるさいから誘い 同

たまに見る鏡虫歯をのぞくなり 同

火の用心リダー格は声変り 同

捨てたとも云われ振られたとも云れ 同

お茶漬の味の道草倦怠期 小松市 位守正柳子

資につかず労にそむいて守衛老い 同

百円の積立なごむ絹布団 同

謹賀新春

前田 伍健

松山市真砂町二一

月原 宵明

今治市泉川通

石田 沐天

大阪市阿倍野区阪南町西二ノ三三

長野 井蛙

山口県防府市大字西佐波令字幸地一三一六ノ一六

杉谷 湖山

鳥取市職人町

秋月 宏方

和歌山市今福東部一二八

唐津虹川柳クラブ

新岡 回天子

佐賀県唐津市新与町

津田 太楼

岡山市中原七二九

小浜 牧人

神戸市灘区中郷町三ノ七

今年も株式の御用命は

江口 証券

金泉 萬樂

大阪市東区北浜一丁目  
電話 八八九一  
大阪府東淀川区  
国次町四七九



そこ冷えをただ着ぶくれて妻も齡  
 笑顔ではとれぬ貸ありブーム去る  
 神主のバイトおふだに糊をつけ 岡山県  
 恩返しすると云われている落目  
 名物は甘酒木魚聞いて飲み  
 款項目汚職費などと書いてなし  
 学会の秋は楓のあるところ  
 豊作の米を我が家は樹で買い 兵庫県  
 労働歌唄うに服が別にいり  
 火を付けて五千円ほんとお出す  
 蕁麻疹嫁に隠してやった物  
 東京へ行くのも医者に見て貰らい  
 握手した人と思えぬ電話口 東京都  
 怒ったように切手も斜なり  
 妹が嫁ぎこけしの位置をかえ  
 くしゃみして燈明又も消しかかり  
 染直し裏返しして秋を着る  
 久々の雨お団子の出来る音 愛知県  
 ハンターが帰りやっぱりきしが啼く  
 殺生をせずにハンター帰って来  
 猫舌の珍客といる寒い飯  
 真剣な顔で赤ん坊乳をだき  
 絶景は雨にまかせる酒をくみ 尾崎市  
 コーヒーでうがいしたのが気に入る  
 倉庫番鼠が智慧を試しに来  
 太陽の匂いが泌みる菊日和  
 襟たてて冬の形に背を丸め  
 お客ではないのと裏から出入りする 天理市  
 貧乏が金歯の似合わぬ人にする  
 ないしょの老眼鏡を見つけられ  
 W化しM化している共かせぎ  
 フアッションシヨーム 顔で引立たせ 大阪市

御見舞の菊が写真で戻って来  
 置時計冬の音して二時を打ち  
 太陽が沈む都会の屋根染めて  
 面会の妻額縁の如く立ち 貝塚市  
 敬老会玩具のようなバスに乗る  
 小康は女なりけり口口に紅  
 純真な力が上り押ししてくれ  
 肥えた娘に目方を聞いて叱られる 高砂市  
 金の要る話になってあくびが出  
 風邪薬でつかと薬局あいそよし  
 英語のはしくれ覚えて親を軽んずる  
 謝って男の面子立ててやり 大阪市  
 鉛筆をなめて句帖に秋が来る  
 秋風よさんまも焼けぬ男あり  
 山中温泉観光  
 湯の宿へ詩情に縁の遠い客  
 喘息が冬を知らせにやって来た 堺市  
 フンフンと蔭口聞く辛さ  
 ストをして万才万才言うてはる  
 眼薬をさして老妻針をもち  
 バス停る所駄菓子屋散髪屋 笠岡市  
 空っぽの頭で口がすべりすぎ  
 だんだんと木石に似て小百姓  
 プライドをもとと見下げた叱り様  
 吊皮が邪魔になる程背が高く 枚方市  
 頼む時何処を押ししたらアンナ声  
 人工星出来たが百まで生きられず  
 宇宙さえ行けるに流感もてあまし  
 お土産は無いよと酒の匂いする 熊本県  
 クラス会嫁きおくれだけ来て呉る  
 宇宙何飛ぼうと桶の輪替え来る  
 サロンパス心の痛みに貼りたい日

<b>川柳雑誌社</b> にしなり支部 島根県大原郡木次町		<b>藤井 明 朗</b>	
土井文 岸川幸 麻生利 石倉旗 萬代念 井石悟 中田五 岡原敏 大角歌 西川雅 後藤梅 志	蝶 幸 風 坊 朗 色 子 子 子 子 子 子 子 子	<b>川雑大聖寺支部</b> 石川県大聖寺局区内永町四八	
石川素百々 細浪木魯 竹浪と 曾谷光 那松恒 中村久 梅田味 桑山と 山田金 山尾武 山田富 木村一 杉浦一 敷地醉 外羊同	草深 醉舛 淵川 秀敏	<b>西森花村</b> 大阪市東淀川区三國本町 一三二 新三國住宅二号	



野次馬になれるしあわせ有難し 大阪市 広瀬 挽郎

秋雨と視線に女囚うたれけり 同 同

自殺記事さかさに読んでナシを 貝塚市 同 同

何か持って行けば機嫌がよいと 貝塚市 同 同

人形もオールドミスとなつて褪せ 貝塚市 同 同

お目もじの上でにベッドのろけ 貝塚市 同 同

よろめいて見たいと思うほど平和 同 同 同

新らしい寝巻でベッドのお正月 岡山市 同 同

しんどそうに虚栄を背負う七五三 岡山市 同 同

サロンパス貼つて編針まだ忙し 同 同 同

用件もろくに云わせぬ話好き 同 同 同

割算になればそろばん邪魔になり 同 同 同

それから聞かざらぬエチケツト 若松市 同 同

女子大を出ても天ぷら同じ味 同 同 同

黒星に勇み足とは書いてなし 同 同 同

記念品値がみしてから感謝され 黒木集 同 同

神のみが知ると汚職がうそぶいた 黒木集 同 同

パチンコが大好き父の太い指 同 同 同

オルゴール四十の恋へ鳴つてくれ 同 同 同

みかんむく俵せそうな顔ばかり 同 同 同

啄木が好きという娘の口答え 倉吉市 同 同

中学の英語で親にたてをつき 同 同 同

雨漏りは受けてチップは派手切 同 同 同

変骨にされて療養板につき 同 同 同

箸で食うライスカレーに沸く我が家 大和高田市 同 同

愛情を示し自転車台へ乗せ 同 同 同

天高くいらぬ金が欲しい秋 同 同 同

着古しを頂くにさえ順があり 同 同 同

コスモスの道はかどらぬ園児服 福岡県 同 同

サロンパス十九の肩をまばいがり 同 同 同

押せ押せと相撲も恋も手は同じ 同 同 同

現像をしたら泣くよな笑いよう 鳥取県 同 同

案山子見に行くと雀らさえずった 同 同 同

よその嫁までも好くだの好かぬ 同 同 同

横向いた活字も趣味の回覧誌 奈良県 同 同

父と来た記憶を妻と菊花展 同 同 同

丹前へ来るとビールも浮気性 同 同 同

一まわりかくして浮気するつもり 大阪府 同 同

別天地までもインフレひびいて来 同 同 同

口説く気へ聖書の話もちだされ 同 同 同

弱い子の薬器用に飲むあわれ 西宮市 同 同

腕力を揮うて男見くびられ 同 同 同

送られるうれしい道はもう曲り 同 同 同

産制を真面目な顔で聴ける年 岸和田市 同 同

御主人をどう呼びますかと新家庭 同 同 同

着換えする父メモロデーの好きな父 同 同 同

押売りへ祖母はお経へ向いたまま 大阪市 同 同

酒呑めば憲兵さんの声を出し 同 同 同

思うこと多し独身主義を捨て 同 同 同

桐一葉散つて縫替え忙がしい 堺市 同 同

ひめくりがあるので株主かと聞 同 同 同

キャバレーの皺が目立つ終電車 同 同 同

所詮叶わぬ事とは知つてする署名 大阪市 同 同

月払いの香りの中にいる新居 同 同 同

末っ子が十文三分で間に合はず 同 同 同

生あくびして金のある笑い様 徳山市 同 同

詩の無い夜水夫黙々舵を取り 同 同 同

修身科のようにコスモス咲いて居 同 同 同

謹賀新春

高峰 柳 児

長野県須坂局区内太子町

須崎 豆秋

大阪市阿倍野区旭町

三丁目一四番地

長野 文庫

今治市神明町

川雜 広島支部一同

謹賀新年

若本 多久志

西宮市津門西口町五〇

電話 ④ 四一四三番

山田 季 賛

山田 スミ子

広島県安佐郡可部町

大手寺公営住宅四号

賀 正

三十三年元旦

石居 高志

菊地 紀久

奥比呂 志



ライバルへ負けてやる気の身まぶし 大阪府  
すき焼の肉買い足しに出るも秋  
我が子なら捨てて置けない神と凝  
美容体操猫もゆっくり寝ておれず 石川県  
出番待つかつらの頭がかゆうなり  
借りて来た目覚よりも先に起き  
呉服屋の世辞真にうけて若返り 小松市  
彼れはもう言葉もかけぬまきに貯め  
煙突へ鳥が止る 電休日  
釘で鍵あけてやったが気がとがめ 広島県  
ごみも泡も希望に濡てるよう流れ  
拍手わくなかを代理として受賞  
外泊をする気女患のピンカール 貝塚市  
一杯の呑める愚痴なら聞いてやり  
逆らえば三十女のむきになり  
流感に妻の薬を貰うて服み 神戸市  
妻の留守隣の鍵が役に立ち  
赤ン坊が出来てスピッツうとまわる  
世論調査して政治屋は手を打たず 笠岡市  
存在をさとらすように背なで泣き  
あの茶目が恋の愛のと悩みだし  
台風の進路が変り肩がこり 笠岡市  
借金を返しに来たに叱られる  
鎌を手に今日は文化の日だそうな  
交番を訪えば案外不要心 大阪市  
マネージャーなどとおぼおだてられ  
いささかのほどこし老婆に拜まれる  
愛犬夫妻の機嫌をようつらず 宇部市  
お便り有難うあて字に困つた書か  
園児より保母がアシカへ夢中なり  
二等辺三角形の恋になり 岡山市  
猛犬に注意の札でテリヤ吠え

藤本 幸永  
同  
同  
同 村上 虹要  
同 関戸宗太郎  
同  
同 山内 俊見  
同  
同 杉本 一鶴  
同  
同 傍島 静馬  
同  
同 佐内 隆文  
同  
同 出原 真奇  
同  
同 橋本 雅集  
同  
同 平田 実男  
同  
同 江国 幽谷

オーバーがないから寒いとは云や  
豊作へ土用の汗はもう忘れ 兵庫県  
よい人でしたなアと忘られてゆき  
つぼ埋める程に御先祖も無かりし  
子の数へ布団の数は足らぬま 滋賀県  
俸は同じ職場の共稼  
来年ということにして交際し  
下駄ばきになつてくずれる脚線美 玉野市  
すばらしい結婚式ですぐ別れ  
オートメイション時代茶碗 扱拾  
祝福をされて特二の人となり 大阪市  
よろめきを誘うが如くネオンつき  
過ちが世間をせまいものにする  
芋を掘る妻に従がう文化の日 玉島市  
ミサイルの世へビッコ引く自衛隊  
お二階は巡査に貸してるのに盗れ  
背番号には驚く程の記憶力 石川県  
夏やせが雪の降る頃まで続き  
弟が兄貴に見えて兄貧し  
奥さん奥さん奥さん押売ミセスにしてし 水見市  
ひも一つにも本妻にはないこなし  
水仙花美人は弱い生れつき  
豊作の祭りたこ焼屋も忙しい 大阪市  
菊活けて主婦の座にゆるぎなし  
ほつとした菊咲いてから水をやり  
泣く親もない身軽さで墮ちてゆき 貝塚市  
懐手お金抱いてるわけでなし  
お子様はと聞かれチョンカーま云さ 大阪市  
鼻の下長いお人とおめられる  
世智辛さ五田の餌に神馬やせ 宇部市  
高崎山猿人間をからかう気  
富有柿歌にもならず村の駅 小松市

同 遠山 一雨  
同  
同 土守 蜻蛉  
同  
同 伊原 明林  
同  
同 河井 庸佑  
同  
同 秀川 承平  
同  
同 齊藤 巖  
同  
同 関 すゞ女  
同  
同 島田 雄峯  
同  
同 家根 抱亭  
同  
同 寺杣 花車  
同  
同 神田 豊年  
同  
尾井 乙三

川 雑 倉 敷 支 部

木村千容  
田垣方大  
水谷水  
松村万古  
藤井春日  
野田素身  
藤井五茶  
相原一善

南 海 電 気 鉄 道 株 式 会 社

川 柳 部 一 同

新年お目出とうござい  
ます 相変りませず柳  
兄諸氏の御柳交を祈る

川 雑 玉 造 支 部  
空 堀 川 柳 会 一 同

福 田 丁 路  
高 槻 市 大 字 氷 室  
六 九 二 ノ 四



スト決行マジックインキもうかす  
 商魂はハッピー姿で来る初荷 守口市 同 藤富 淀月  
 随行の初東上へ富士が晴れ 同 鎮浪 錦花  
 夕方をせわしくチンドンヤが通り 宇部市 同 木田 留三  
 釣って来た事より逃げた事へふれ 同 小田 柳叟  
 お守を貼って崖からバスは落ち 西宮市 同 小林守株漢  
 信心をしつつ雞の首を絞め 同 林 昌男  
 風邪の後女将の足袋の薄汚れ 貝塚市 同 安平次弘道  
 よろめいている口紅がいと濃く 同 北村 三歩  
 松茸の少ない山へピラは呼ぶ 貝塚市 同 塚脇 笑太  
 末っ子に死なれて頑固風邪をひき 同 前野 美保  
 客席のひとこ遅れて いる 笑い 大阪府 同 松井野狸翁  
 レントゲン無駄です僕の心臓部 山口県 同 鎌田 銀子  
 職場結婚で給料へそくれず 山口県 同 丹波伸字呂  
 休日は妻のプランで使われる 鳥取市 同 塚田 東雲  
 さざはしを背負うて上る七五三 同 同 村上 球絵  
 連休に金がないから庭掃除 京都府 同 小谷 仙山  
 春夏秋冬それぞれに呑む種になり 同 同 同 同  
 西暦へよみかえて困まだつづき 山口県 同 同 同 同  
 これしきの傷へ神経みなあつめ 同 同 同 同  
 丹精の花押売にほめられる 同 同 同 同  
 お茶代りなどと上戸を喜ばせ 熊本県 同 同 同 同  
 ビク張った腕を組んでる年忘れ 同 同 同 同  
 倒産が垣より雑草高くする 鹿島市 同 同 同 同  
 野心ふと愛の腫にふれくずれかけ 同 同 同 同  
 人生の端に来てから神信心 大阪府 同 同 同 同  
 穂がたれて村の祭りの灯がきれい 同 同 同 同  
 光から見離され耳の有難さ 西宮市 同 同 同 同  
 心まで塗りつぶしまるルージユ引 同 同 同 同  
 秋は好し道に落葉の匂あり 西宮市 同 同 同 同  
 バイバイと追い立てる子が送り 同 同 同 同  
 農村を嫌った娘にも米送り 玉野市 同 同 同 同

神様もどうにもならぬ社のさびれ  
 パチンコですられ石鹼塗りたくり 米子市 同 国谷 散歩  
 卵巣摘出からの浮気と気がつかず 同 同 同 同  
 人一人ひかれて記事に五六行 広島県 同 杉原 愛鳩  
 お家安泰坊ちやまはカメラ狂 大阪府 同 同 同 同  
 二次会へ心は妻に手を合わし 同 同 同 同  
 親に似て鉛筆なめる子が育ち 茨木市 同 同 同 同  
 古傷に触れられそうで話題かえ 同 同 同 同  
 不景気な話へ無心言いそびれ 同 同 同 同  
 食べ方があると語りから気が疲れ 金沢市 同 同 同 同  
 いい夢を見てたに鼻をつままれる 同 同 同 同  
 三通話結局会いましょうで切り 大阪府 同 同 同 同  
 プローチを買って楽しい小半日 同 同 同 同  
 職歴の通りに尻が落ちつかず 宇部市 同 同 同 同  
 お茶漬の音も気にしてもう二十 同 同 同 同  
 兎も角も秋をグッとセルフタイマー 小松市 同 同 同 同  
 金婚を祝うに庭の松と撮り 同 同 同 同  
 不渡を友につかます程窮し 芦屋市 同 同 同 同  
 衝角を削り美人の煙草店 同 同 同 同  
 座布団は結構結構と尻をすえ 岡山市 同 同 同 同  
 結構な料理ですなあと箸つけず 同 同 同 同  
 地下鉄に来て冷酒がまわってき 岸和田市 同 同 同 同  
 ずけずけと云うを愉快な人にされ 同 同 同 同  
 御堂筋銀杏もカメラへポーズする 大阪市 同 同 同 同  
 七五三子の無い夫婦に淋しい日 同 同 同 同  
 子供にはピアノも習わせたい間借 新潟県 同 同 同 同  
 雑踏を見下ろし個展静かなり 同 同 同 同  
 好伴侶カナ聲音の英和買い 大阪府 同 同 同 同  
 さぬきの旅から 同 同 同 同  
 母つれてくる日も屋島晴れてくれ 同 同 同 同  
 おいおいと名前あるのにこで呼び 鳥取県 同 同 同 同  
 赤い声無視し横綱また敗れ 同 同 同 同

# 謹賀新春

川雑出雲支部

尼緑之助

出雲市高松町

木口賀峰

吹田市一、二、三七番地

橘高薫風子

きつたかくんぶうし  
大阪市北区堂島上二ノ  
五二電話四六六三番

川雑堺支部

八木摩天郎

八木徳子

堺市九間町山ノ口筋

川雑吳支部

林野魁光

余項紅児

吳市吉浦中町一丁目

吾郷玲人

大阪市住吉区  
御崎町一丁目



新学士恭だけが一人前の腕 出雲市 石橋方古人

正直なとこ王座ゆずってほつとす 金沢市 同

いつ売れているのか仏具屋灯を点し 京都市 能村 唐衣

三面鏡女なかなか諦めず 京都市 同

サボテンの醜さかばう花がある 京都市 稲岡 秋月

造花にも晴れの舞台が待っている 岡山県 同

表彰をされて財布に空があき 岡山県 二宮 吟平

もう酔うてはならぬはず誘い出し 今治市 同

ヴィタミン剤はらんだ妻へせめて買 今治市 越智 一水

呑む事の話呑み手がすぐ走り 高知市 同

おちぶれて見れば影まであわれ 高知市 川竹 松風

芸廻し音痴の方に湧く拍手 鳥取県 同

白バイはスピード違反を軽く抜き 鳥取県 亀崎 漫步

飲んでいる写真ばかりと妻の愚痴 広島県 同

真剣に値切って見たが止めにする 広島県 山田スミ子

父ちゃんに叱られ母ちゃんを叱り 鳥取県 同

無理をした土産と見抜き里の母 鳥取県 土江 洋々

飛脚から衛星までを生きた顔 和歌山県 同

王串を捧げる順もボスがきめ 和歌山県 木下 一休

食卓は明るし闇の米が買え 大阪市 同

公園のごみに日雇職につき 大阪市 岸川 漣

あてやかに切られ歌劇の唄となり 大阪市 同

花道を歩く気持の退院日 大阪市 堤 勝三

団体で歩いて土産買 いそこね 岡山県 福田 祥男

見舞の子せめて抱きたい肺活量 貝塚市 永吉 喜好

借カメラついでに家中着替えさせ 笠岡市 木山 二路

満ち足りた心遊園地の夫婦 小松市 村井 城南

恙なく暮し御無沙汰 続くなり 大阪市 正口 辰始

パパママと云われて親父すね 大塚市 安並 十七

アベックへ手を振るパスは 京都市 藤川沙智子

去る者を追わない意地が悔まれる 山口県 原田 綾女

文人の手つきでみくじ結ばれる 大阪市 藤村 孝江

肩叩く様にトンボが来てとまり 大阪府 国枝 玉枝

母さんにかぶり振ってたひと嫁 大阪府 佐野 榎子

もめ抜いた校舎手打の地鎮祭 八代市 永松 道雄

つり銭を貰う事ない甘い母 大阪府 吉川 悦子

旅土産色街あさつた話だけ 須崎市 高橋 蟠蛇

蛍光灯で縄縫っている囲炉裏端 七尾市 松高 秀三

スタイルをごま化 ハイヒール 大阪府 竹内 千里

婦人靴商売冥利の足に触れ 岸和田市 中野三四郎

提灯屋いつともなしに電気器具 愛媛県 河本南牛子

ふところが寒く空瓶整理され 西宮市 村上 道草

淋しさをダイヤ光らすのも女 西宮市 三上 芙路

秋淋し扇風機の月賦まだ残り 堺市 田中 狂二

仲人へ夢を托してお茶を出し 笠岡市 谷本鈍愚坊

魂胆もなく一合を妻とのみ 西宮市 樋口 舟遊

出稼ぎのリンゴ娘はガムを噛み 伊丹市 西沢 堅持

どうですと眼鏡屋新聞見せて呉れ 小松市 浅野 芳郎

落葉踏む昔の恋の音がする 今治市 越智 義夫

ポニーテル若奥様によく似合い 松江市 岡崎 祥月

彼の手が大きく見えて角まがる 大津市 杉原 吟女

日雇にアブレ血を売る列に入る 神戸市 為井 翠嵐

髪直し合うも乙女の友情か 名古屋市 藤沢不二郎

稲刈りに思い出モンペ並んで居 西宮市 酒井 丹謠

不景気は質屋の看板ならべさせ 京都市 稲岡 秋月

耕うん機音きくだけの小百姓 兵庫県 斉藤たけお

式あげる日が早まった多収穫 大阪市 尾花 群雀

嫁ぐ夢秘めて蒟蒻球を掘り 倉敷市 小倉美音子

まだ生命あるを寿命にしてしま 善通寺市 橋 十四呂

共稼ぎ敷いてる様に人はいい 天理市 岡田花奈女

ミュージック ライオン 兵庫県 藤井雅佐女

約束を守りおおせた遺児育ち 田辺市 室井八九寸

食うだけが精一ぱいを飲んで居る 出雲市 山本 朱紅

神殿をうらに廻ってあつけなし 大阪市 中西兼治郎

川柳雑誌社

淀川支部

大阪市東淀川区  
十八条町八七

武部 香林

若本 多久志

加納 山茶花

西森 花村

坂田 東洋男

志水 礼司

早川 清生

武部 若菜

水野 水茶

岡部 三十郎

小林 文児

中村 茂夫

小林 山舟

齐木 美洲

小島 さぎす

木村 水堂

# いぬもあるけばほうにあたる 當戌歲初春放談

土井文蝶  
須崎豆秋  
不二田一三夫

豆秋「文蝶さん、おめでとう、退院されて。」

文蝶「ありがとう。オヤ、豆秋さん、マスクを頭の後ろへかけて、なにかのオマジナイ？」

豆「いや首の上へデンボができて、こういうように両耳で逆に引っかけて糊帯の代りにしとるんですよ。きょうも犬にはえられませんでした。流感マスクを後向きにしてるのは怪しいと思つたか。(笑)」

一三夫「犬がまさか。  
豆「それはシロト衆の考えだよ、犬のカンってバカにならんヨ。」

金借りに来たなど犬も吠え立てる (きはち)  
人間の無能を警察犬わらい

(柳風子)  
文「警察犬も鼻と感で役立っているのだからね。しかしこんな犬もいる。」

金落ちていたのに犬は目もくれず (一浪)

「一それが五千円札だったら家へ帰ってからエライどつつかれました

やるナ。(笑)

豆「昨年は宇宙元年で、NO・ワンの足跡を残した英雄ミス・ライカ犬が、文字通り昇天してしまつた。」

文「何とかして地上へソ連としても帰えしたかったでしょうに。」

「一あれがオスで、宇宙に電信柱があつたら小便ができるから帰つたでしょうけど。」

文「それをフルシチョフに教えてやりいな。(笑)」

豆「猫はエチケツトを心得ているから、オシッコをしてもかならず砂をかけるが、犬はどうもその点イカンね、どこでもやってしまうのだから。」

文「最近説んだ「愉しわがベリーモンコルトル夜話」ではフランスの犬は自動車のドロ除けへ小便をするそつだ。」

「一さすがにオシヤレの国柄だけある。(笑)」

豆「水で洗う世話がない。(笑)」

文「街の清掃夫が街路の掃除を毎朝するのだが、犬の排便物ばかりだそうだね。」

「一ということでは犬が多いということですね。」

豆「大阪には登録されている犬だけで十萬四いるらしいが、野犬やモグリで飼っている犬となると相当な数になる。獣医が百人以上いるそつだ。」

文「犬を飼うだけ日本が立直つたともいえる。敗戦直後には犬を飼うどころのさわぎじゃないものナ。豆秋さんの句に

ワンワンよ気の毒ながら米がない  
「一豆秋さんには犬の句が多いようですが。」

豆「五十句以上ある。」

「一ボクの好きな句に、  
けなげにも家主の犬を嚙んで来た (豆秋)」

痛快ですね、ほめてやりましたか。  
豆「牛肉を買ってきてな、御馳走

をしてやったもんだ、えらいやっちゃ言うてな。(笑) 親方は店主で家主には頭が上がらんが、犬はそんなこと知らんものな。」

「一畜生の浅ましさをですか。  
文「忠犬だよ。(笑)」

文「犬の恋愛は自由すぎて、アレは風紀上よろしくないよ。」

「一ボクとこは娘ばかりで、子供の時分にあれを見て、お父ちゃん、あの犬、何をしてんの? なんてきかれて返答に困りました。」

文「そりや誰だつて困るよ(笑)」  
豆「しかし自由でない犬もいる。名犬は恋の自由も許されず (方大)」

「一基地の子が出来ると系図を汚がすわけですね。」

文「犬にも好き嫌いがあって、嫌いな男(オス)にはいくら口説かれてもウンと云わない。絶対貞操を守るものだ。」

「一人間ならウンと尻を向けられたらアウトだが、犬ならセーフですね。」

文「キミはどうもオ下劣でイカンよ。(笑)」

豆「馬琴の「里見八犬伝」など、今の若い人には納得のゆかぬ物語りだろうね。」

「一伏姫が犬と高砂やを挙げたなんて、誰も興味をもってくれませんね。犬山道節が村雨丸を抜いて雨を降らせたり、犬塚信乃と犬飼現八の芳流閣の立回りなんかは受

生産用ゴム・ビニール製品販賣



## 丸山産業株式会社

大阪 市北区太融寺町一三番  
電話 大阪 〇三三六

出張所 東京都千代田区神田美土代町六  
下関 市大和町三十三



福田山雨楼氏が逝かれてから空席になっていました副主幹に、このたび中島生々庵氏を迎えることになりました。氏は川雑派支那時代・松坂俱樂部時代を経て今日に至るまで二十年近く路郎師に私淑されています。元、川柳不朽洞会理事・医学博士。社稷いよいよ堅く、本誌ますます発展することを祈ります。

川柳雜誌社

(ペン・一三夫)

社 告

けますね。  
文一そういう映画はキミとこの売店がよく売れるということだね。  
一「尻ツ尾をまきました。(笑)」  
豆「飼い主が犬に似るのか犬が飼い主に似るのか知らんが、実際に双方が似てくるのは不思議だね。  
一「そんなものですかね。」  
飼主も土佐犬らしい顔にな  
り (豆 秋)  
最近それでチンを飼わなくなっ  
た。鼻が低くなったら困るから。  
(笑)  
豆「人間の整形美は鼻にあるよ  
うだが、犬にも整形外科がある。耳  
を立てる注射をする。  
一「初耳ですね。」  
文一「はなしをマゼカエしちゃイヤ  
ン。(笑)」  
豆「シェパードなんか、手術して  
びんと耳を立てるんだね。  
一「卵が整形手術して耳が立った  
ら猫から苦情がくるでしょう。」  
文一「ようそんなアホなことばかり

考えてるなア。(笑)  
豆「テラマイシンやオーレオマイ  
シンもこのごろの犬にウツそ  
うだ。避妊手術もやるというから、  
もう人間様と交らんね。  
文一「若返り法もあるのだからな。  
犬の寿命は十五、六年といわれて  
いる。人間のトシに四を掛けたも  
のが犬の歳だといわれている。だ  
から犬を買うときは肩の落ちてい  
ないのを選ぶのだ。つまり生後四  
年位のメスは番茶も出花の頃  
だ。(笑)」  
文一「十九平氏の句に、  
橋の下に住む人間が犬を飼  
い  
というのがあるが、まあ湯たんぽ  
を飼っているようなもんだね。  
(笑)」  
一「つまり暖房完備ですか。  
豆「ボクの句に、  
親方はルンペンだとは知ら  
ぬ犬

お彼岸を乞食の犬も坐らさ  
れ  
また、こんなもある。  
座ぶとんに大座らせて差し  
向い  
一「いくらなんでも犬と一緒に晩  
餐をするのはカナワシですな。  
文一「愛犬家ってもの、みんなそう  
だよ、現にこの間まで入院してい  
た時なんか、犬二匹をつれて入院  
していた患者があったよ。マリと  
パールという名だったが。  
三流館夫婦仔犬を抱いて来  
る (一三夫)  
映画館なんか違反なんだろう。  
一「シヨールの下へ隠して入場  
するのです。映写中にクンクン泣  
きだすとスルメを買いにきてくれ  
ますよ。」  
文一「犬の品評会で一等をとったた  
め、犬にこりすぎてとうとう商売  
を棒にふってしまったのがあっ  
た。その家へ行くと、障子も襖  
もメチャメチャになっている、家

の中を犬が走り回るんだね。よっ  
ほど好きでないと飼えないよ。馴  
らすため、食べ物にはかならず自  
分の唾をつけて食わせるのだそ  
うだ。猶犬なんか水の中を行く犬  
は毛の長いもの、又は山野に行く  
のは毛の短かい活動のしよい犬を  
連れて行くそうだから。  
一「家畜の中では犬が一番古いの  
だそうですね。一万年数千年前か  
らそうです。  
豆「一番親しみがもてるね。特に  
子供のほとんどは大好きだ。  
犬と子と夕陽の中に草臥れ  
る (柳華)  
野良犬へ孤児すり寄って日  
向ほこ (真女)  
文一「東西を問わず子供の本にはか  
ならず犬が出てくる。それに犬は  
賢しい。学者犬なんていうのが  
いる。  
一「あれは飼主がうまく使ってい  
るのだそうです。犬の聴覚ほどす  
るどいものはないそうで、客席か  
ら3+2+4+1と問われると飼主  
が犬にだけ聴える程度の小声で、  
答えの9の札を持ってこいと命じ  
るらしいですね。  
豆「犬の句となると  
従うてゆかねば犬の首しま  
り (雅園)  
文一「名句だね。  
一「もう二ページ位いつづけてゆ  
きたいのですが、ではこのあたり  
で。さあ今年は「ここ廻れワン  
ン」というような宝探しの犬でも  
飼いましようかな。」

ユアサ電池株式会社卸代理店  
日本電装株式会社指定サービスステーション

淀川電機工業株式會社

大阪市福島区海老江中一丁目一一一  
電話 大阪 4531—4532



# 入門講座

## 研究題「暦」

戸田古方

老練な佳吟も初心者らしいのも交り、仲々賑かです。

棟梁の家で手摺れのした暦

南天

余韻あり、句品あり、出来すぎ

ているほどきれいな句です。この

暦はどうしても旧暦でなければな

りません。

もう種をまく頃暦を出して

来る 葵丘

「来る」を「みる」にしたら

「みる」では季節感にとほしく、

やはり「来る」とこなければなり

ません。

旧暦をみるだけで本屋へ寄

ったなり 静観堂

「寄ったなり」が気になりま

す。しかし変えるとなると根本的

組替が必要です。

旧暦が合点の行かぬ昭和の

子 周甫

と言う

未申とか辰巳とかいわず卯辰が

老人のかたくなを表現しているよ

うにも感じます。

古くなったと自覚をするが

暦を見

「古くなったと自覚」する自覚

を具体的にいえたらと思いますが

日曜の大安さがす老眼鏡

八九寸

「日曜の大安」といったところ

に時代に生きる老人の感覚があり

ます。

さんりんぼうへ硝子のわれ

る音がする 初甫

どうしても抜け切れぬ暦の迷

信。だが、

十円の暦へ運勢たよりきり

陽子

いよいよ人間性がマナ板にのっ

て来ました。そして

来年の暦でうっかり調べて

い 幽谷

ということになりかねません。句

主は留めの「い」の所に「見」と

かいて消しています。「見」は文

法とは別にすんでしまつた、すん

でいなくとも静しな感じませんが

「い」の方は今調べている進行状

態となり動です。

運勢から縁談へ

相性は存じませんと姉女房

真路

相性よかったのでしょうこの御

夫婦は。だからその必要もなかつたのでしよう。

また一つ仲人暦へ丸をつけ

実男

暦くって仲人ずれのした仕

草 一句

両方とも仲人稼業というところ

でしょう。稼業ともなれば暦はア

クセサリー。「仲人ずれ」の用語

は面白いですが、平凡ながら前の

句の方が無難なようです。

気に染まぬ縁談暦に断らせ

井平

「縁談」のルビ「はなし」を生

かせて仮名にしては結婚話に限ら

なくなるし、ルビはわずらわしい

し、「縁は」としてみたら。

運命開拓の句

暦では吉どん底がまだ続き

真寄

運勢を肯定しながら、半ば疑い

たくなっています。反省の資料に

するだけのゆとりがないのです。

景品の暦「要らん」と若い

者 三四郎

「若い者」は「要らん」と強く

いいきることばを受けるにしては

弱すぎます。「ふりむかず」と

すると年令が出ないようですが、

これは若さという精神年令を表現

ばいいのではないのでしょうか。

暦見て今年計が本決り

十七

「本決り」は一寸説みにくいむし

# 謹賀新春

南区医師会文化部

杏林川柳会

（イロハ順）

岩崎 一伸

大島 明雄

河村 瑞川

中島 生々庵

中島 小石

山川 阿茶

安岡 珊枝郎

平尾 太希志

牟田 一哲

川柳雑誌社

備前支部

川柳雑誌社

岡山支部





# 巴御前

山吹

## 富士野鞍馬

木曾で、義仲が世話になつて、乳母の夫、信濃権守中原兼遠の子に、樋口兼光、今井兼平と、巴という娘があつた。その巴と義仲は結婚していた。

巴は、美人で勇武であつたので、義仲はいつも戦争には同行して、一方の大將にしてゐた。また、山吹という第二妾も従軍してゐた。それを川柳は見逃してゐない。

木曾山のやうに火をする妾同士  
(タル四九)  
山吹を大ひきずりと巴いひ  
(拾五)  
「ひきずり」とは、おしゃればかりして働かない女をいうので、やきもちも猛烈であつたであらう。

木曾殿の妾一人は生まぬ管  
(タル十一)  
木曾殿ばかり山吹に実をならせ  
(二九)  
等、実のならぬ山吹の花にた

とえられてもいる。

兼平を兄さんなどと巴いひ  
(万安四)

義仲の四天王の一、今井兼平は、正に巴の兄である。

木曾殿の左りはなれに巴屋し  
(タル一〇八)

木曾殿は御部屋様まで腕をこ  
(拾五)

手軽くは参らぬ木曾の思ひ者  
(タル六三)

巴は、余程の大力であつたと  
伝えられている。それで、

木曾殿はいい陣太鼓もちたま  
(タル四六)

女でも太鼓の紋は世にひびき  
(八四)

と、詠まれ、太鼓の紋は巴で  
ある。

木曾の陣くしげ鏡台取揃へ  
(タル一五七)

木曾の陣中鏡台に糠袋  
(一五六)

出陣に巴はちよつと鏡立  
(一三八)

髪下げのあるは巴具足なり  
(二)

髪かけに巴は古い陣羽織  
(タル一八・一九)

縦びに巴をたのむ陣羽織  
(一五七)

木曾の陣から歯を染めた武者  
一騎  
(七八)

等、陣中色々の女のたしなみ  
を想像している。

小便の時は巴は陣を引き  
(拾五)

くさずりにかからぬやうに巴  
たれ  
(タル十三)

小具足のままで巴はばかり  
所  
(一二六)

月七日かげの馬にも巴乗り  
(一一四)

陣中で巴は馬にふたつのも  
(拾五)

などと、女の生理について、  
余計な心配もしている。また

燈火が消えりや巴も女なり  
(万宝十一)

朝日にはとける巴の雪の肌  
(タル八一)

アレいっそもうに義仲うごか  
れず  
(四五)

木曾をだきしめおどしをね  
だるなり  
(二二)

緋おどしを木曾は巴にねだら  
れる  
(六〇)

と、川柳は閨房まで見透して  
いる。

「平家物語に」

「木曾は信濃を出でしより、  
巴、山吹とて二人の美女を具せ

られたり。山吹はいたはり(病  
氣)あつて都に止りぬ。中にも  
巴は色白う、髪長く、容顔まこ  
とに美麗なり。屈強の荒馬乗  
の、悪所おとし、弓矢、打物取  
つては、いかなる鬼にも神にも  
あふといふ、一人当千のつはも  
のなり。されば軍といふ時は、  
札(さね)よき鎧著せ、強弓、  
大太刀持たせて、一方の大將に  
向けられけるに、度々の高名、  
肩を双ぶる者なし。されば今度  
も多くは者落ち失せ、討たれけ  
る中に、七騎が中までも、巴は  
討たれざりけり」

とあり、六条河原の敗戦で、  
義仲軍は七騎となつて、大津  
の方へ逃げる時、「日本外史」  
は

「重忠マタコレヲ追フ。義仲ノ  
妾ヲバト曰フ。兼平の妹ナリ。  
臂力アリ、常ニ軍ニ従ヘリ。是  
ノ時、単騎止り鬪フ。重忠コレ  
ヲ生得セント欲シ、目ヲ注イデ  
コレニ薄リ、巴ノ甲袖ヲ攫ミ  
ヌ。馬ニムチウツ。馬躍ツテ袖  
絶ユ。重忠コレヲ捨テテ還ル。」  
と書いてゐる。川柳は、それ  
を

重忠は巴とくんで手を洗い  
(拾五)

と色っぽくしている。

義仲は西して丹波路へ落ち  
ようとしたが、勢多の範頼軍  
へ向つた兼平を気づかい東し  
て大津の方へ逃れ、巴との最  
後の別れとなつた。

# 謹賀新春

衣桐上御慶下ル

井ノ下晴芽

衣桐寺ノ内上ル

井ノ下秀徒

山科勧修寺本堂山

石川よしろ

神宮道通院病院内

大鶴喜由

丹波京北町林業指導所

田中千潮

相国寺西門町

田中烏雀

山科西野山

竹松九角

今小路御前西入

楠光二郎

山科川田西浦

榎本憲一郎

山科野子塚

小林亀一

山科西野山

平井絵丘

山科勧修寺下ノ茶屋

平岩司郎

小山東花徳司

本儀親生

「平家物語」に  
「木曾殿巴を召して、

『おのれは女なれば、これよりとうとういづれへも落ち行け。義仲は討死をせむずるなり。もし人手にかからずば、自害をせむずれば、義仲が最後の軍に、女を具したりなどいはれむこと、口惜しかるべし』

とのたまへども、なほ落ちも行かざりけるが、あまりに強ういはれ奉って、

『あつばれよからう敵の出で来よかし、木曾殿に最後の軍して見せ奉らむ』  
とて、控へて敵を待つ所に、ここに武藏國の住人、御田の八郎師重（外史には遠江人内田家吉）といふ大力の剛の者、三十騎ばかりで出で来る。巴、その中へわって入り、まづ御田の八郎におし双べ、むずと組んで引き落し、わが乗ったりける鞍の前輪におしつけて、ちとも働かさず、首ねお切つて捨ててんげり。その後、物具脱ぎ捨てて、東國の方へぞ落ち行きける。」

時は、寿永三年（一一一八）四月一日、巴二十八歳、妊娠中であつた。

生唾をはき／＼巴切つて出る

(タル四)

お妾は大きな腹で首をぬき

(拾六)

容顔を崩して巴首を抜き

(万安四)

わいる事よしなど巴首を抜き  
いけぬ時巴御前も共かせぎ  
等、川柳に詠まれている。  
神功と巴鎧に割を入れて  
神功皇后も妊娠だったの  
で、それと並べても作られて  
いる。

(タル一四九)

義仲、粟津で最後の時は、  
兼平と二人切になったのであ  
るが、

田の中でもえ／＼と三声す  
る  
巴にも粟津が原の御残念  
と  
巴にも見ぬかれ玉ふうちかぶ  
と  
などと作られている。

(拾五)

こうして、巴は信州へ帰  
り、後に捕えられたのである  
が浄るり「ひらかな盛衰記」  
には、首を抜いた直後に、和  
田義盛に生捕られたことに書  
かれてある。それを川柳も、

残念だのんしと巴生捕られ  
生つばをはき／＼巴生捕られ  
義盛は粟津が原でふるいつき  
こう組しきなさんしたと巴云  
ひ  
と詠んでいる。

(タル九六)

捕えられた巴は、鎌倉へ送  
られたが、義仲の子を懐妊し

ているから、島流しにせよと  
頼朝はいったが、和田義盛が  
懇望して、妻に貰うけた。  
それをまた川柳はおもしろく  
詠んでいる。

よしもりにともへ尻からいけ  
どられ  
義盛は世帯崩しを申請け  
甲胃のままで巴は縁につき  
義盛の内儀は立ちのままで来  
る  
その後は巴毎晩組しかれ  
木曾殿のたいたいと和和  
木曾殿の秘蔵の太鼓和田た  
大味を承知で和田は拝領し  
和田の腹巴も初手は探りかね  
義盛も飯を喰ふにはあきれは  
高盛をつねなら巴喰ふ気なり  
など、信濃者だから大食にさ  
れてゐる。また和田の一族は  
九十三騎あつたので、

九十三騎の甲胃へ嫁披露  
お初にと九十二人へ巴云ひ  
巴が腹は太鼓だと九十二騎  
義盛は九十三盃目に納め

(拾六)

(タル一六六)

(拾六)

と浄るりでは陣中の祝言にな  
つてゐる。また  
「朝日將軍義仲の、名を象りて  
生れ子を、朝比奈の三郎義秀  
と、古今に秀でしつはものは、  
この胎内の子なりけり」  
と作られている。それで、  
厄介のあるは義盛合点なり  
義盛はお土産らしい子を育て  
巴の長刀朝比奈は潜つて出  
の句がある。  
その後、畠山重忠と会つて  
尻もち以来と秩父は和和で云  
ひ  
腹に居た時であつたと巴いひ  
といつただらうと脚色してい  
る。

建保元年（一一二一）義盛  
が、北条義時と戦つた時に  
は、巴の武勇の話もないので  
和田いくさきどくに婆ア武者  
が出ず  
和田合戦になぜか出ぬ婆ア武  
者  
と詠まれている。そして巴  
は、越中へ行って尼になつ  
て、九十一才まで生きていた  
という話である。

義仲寺に和田内とした銀包  
木曾殿と後ろ合せへ巴すね  
などと、義仲の墓に因んだ戯  
作もあつた。

(拾五)

# 謹賀新春

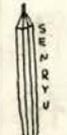
土井文蝶  
大阪市西成区松通  
九ノ三

富士野鞍馬  
京都市東山区清水四丁  
目一七一

川柳平安  
贈進をつづける京都贈果の代表月刊誌

見本巻八四切手・枚半二七十四頁共  
雑 詠 十 切 進 者 福永 泰典  
初歩講座 五 旬 担 当 布部 幸男  
切 毎月十日 翌月号発表  
京都市中京区夷川通烏丸西入  
平 安 川 柳 社  
振替口座七六五番・電話四五二七番

味の七-J  
モダン 川柳  
心斎橋大丸北の辻東へ  
御門  
TEL 6684  
御集会には階上御利用下さい





# 勤務評定と川柳

今治市 長野文庫

昨年来もめ続けて居た愛媛県の教員勤務評定の問題が、今年も又大問題になり全国の視聴を集める大混乱を起したが、川柳人がこの問題をどう見たか、去る十二月当地の某旬新聞に現れた川柳から面白いところを拾って見よう。

ほうれん草とは云い乍ら食えぬ奴 星斗

勤務評定の御先棒をかついで居るのは「ほうれん草先生」つまり根の赤い先生と云う意味で作った川柳らしいが、この句丈ではどうもピンと来ない。併し前書に勤務評定とあると勤務評定に賛成の川柳子らしい。

甲乙をつける立場が逆になり 星斗

甲乙をつけて甲乙つけられる 同

甲乙と差別されたていきり立ち 同

三句共単なる弥次的批判で川柳としてもよい句でもなく素人臭いが、これもよく読むと先生へ皮肉をあげて居る匂いがある。立つ方は生徒にまかせ坐り込み 星影

愛媛県庁前にも坐り込み事件があったが、文部省へも坐り込みをやりに、文部省も手こずり、鶴町署に応援をたのんで出動して貰って

平垣書記長、宮の原副委員長が住居侵入容疑で逮捕されると云う一幕もあった。

足りぬ先生二割休んで足ると云う 総夫

先生の数が足らぬから完全な教育が出来ないと云い乍ら二割三割の先生が休んでそれで何で教育が出来るのかと云う皮肉か。昇給もせぬに女房またはらみ 登久坊

家庭事情を披瀝しての泣きおとし川柳。鉢巻をした先生に教えられ 一穂

先生が鉢巻すれば只の人 無名子

先生も人間だ。労働者だと云う以上鉢巻姿も決して異常でないが、明治生れの者には先生の鉢巻姿がドエライ姿に見える。ちと叱りすぎて先生気にかかり 元山

勤務評定と云う題へ出す川柳には惜しい、中々よく出来た川柳。すねている先生いい点やれませぬ 三郎

句は不出来だが思いのままです。りと云い切ったところ巧みです。黒板へ向いて先生生あくび 花の介

評定の問題にあまり関係のない

句だが、この句も先生に余り好意を持って居ないらしい。

鴛や師をなつかしみ訪ねて来 冠の字

師を訪えば芙蓉に障子開け放つ 同

一合で盃ふせる老教師 春郎

先生は生みの親より尊敬される。先生は子弟を慈くみ、子弟はこよなく先生をあがめる。昔も今も師の恩は高く尊い。

今から四十年も昔、日本の年と云う雑誌で「学校と役場の間を春の川」と云う俳句が一等賞に選ばれた者から特に名句として、賞賛されたことがあったことを思い出したが、俳句の進歩、川柳の向上と共に世のうつり変りに感慨無量である。

好まざる波紋にゆれる伝馬船 三十二年十二月

## 初笑い

広島山田季賛

一介の勤め人での悲願達成までには、いろいろの苦労があった。しかし今おもうと、それがなにもかも楽しい思い出である。郷土広島支部の人たちの声援もあったし、路郎先生始め大阪の方々の愛情もあつたし、妻の協力もあつた。子供を連れての苦しい作句時間や、全没の悲しみもあつた。しかし不朽洞賞杯を広島へ持ち帰っ

たよろこびの前には、それらの苦しみは微々たるものであつた。みなさんありがとう、おかげで季賛は男になりました。

昭和三十二年度

本社 天位番附

河井庸佑

景気よく初場所のふれ太鼓から、吉例の天位番付を発表します。三十三年度から自正月句会、至十二月句会といたします。

(東方)

- 横綱 三茶司 (5)
- 大関 阿茶司 (5)
- 小関 一三夫 (5)
- 前頭 淀三園 (4)
- 潮松園 (3)
- 水生堂 (2)
- 多志庵 (2)
- 多志庵 (2)
- 博也 (2)
- 万楽 (1)
- 都子 (1)
- 利武 (1)
- 香林 (1)
- 花車 (1)
- 立見 (1)
- 凡九郎 (1)
- 季九 (1)
- 白溪 (1)
- 麦太 (1)

# 謹賀新春

橋本 緑雨  
大阪市東区吉区平野  
西ノ町八三

川端 鬼醉  
大阪府南河内郡南大阪  
町軽里 電古市一二二

岡山県大原謙柳会  
本 田 恵 二 朗

川柳中支部 (旧池田支部)

- 菊田 いさむ
- 永藤 彌平
- 小池 しげお
- 竹内 圭三
- 村上 ゆずる
- 黒川 紫香
- 戸田 古方

川柳雑誌社ハワイ支部

# ウイロー社

同人一同

# 紙捻の犬

——紙捻藝術の  
中川一瓢斎翁にきく——



(写真は紙捻の犬と一瓢斎翁)

古稀三、七十四翁の一瓢斎翁は云うのだそうである。五十年紙捻芸術に生きていける人である。その作品は天覧、台覧の榮に浴し、広くニュース映画にも紹介され、海外にもその神技は知られ、大は二十五間の龍から小は米粒大の馬まである。  
こんよりと  
紙捻(かんより)紙捻(こうより)紙繩(こより)接按(かんせより)馬鹿捻(こより)神寄(かみより)不思議(かんせんより)と、

この名句のように、この一瓢斎翁も親類知己からは狂人あつかいにされているとのことである。靈夢によって作品を創る——そこに柳魂と相通じるものがあるような気がする。川柳人はこのカンヨリの犬をどう見たであらうか。  
(摩天郎記)

須崎豆秋  
犬は犬でも俺だけは植物だ

正本水客  
春の風こよりの犬が動きそう  
手に戴せて紙捻りの犬が動く息

丸尾潮花  
かんよりの犬は手垢でよこされる  
かんよりの犬片足を伸ばされる

西村梨里  
かんよりの犬スマートな型で立ち

後藤梅志  
かんよりの犬こけそうな影をもち  
おじいちゃんかんよりの犬せがまれる  
かんよりの犬ははたきで飛ばされる

不二田一三夫  
犬ころをこよりでつくるほど治り  
紙よりの犬は草月流で立ち

同 同 同 同  
古 永 高 万  
方 断 志 的  
(1) (1) (1) (1)

横 綱  
水 客  
秋 容  
(5) (5)

大 関  
梅 文  
里 秋  
(4) (5)

小 関  
幽 谷  
志 里  
(3) (4)

前 頭  
梅 志  
水 志  
(2) (2)

同 同  
淡 白  
舟 水  
(2) (2)

同 同  
与 呂  
香 志  
(2) (2)

同 同  
紫 呂  
香 志  
(2) (2)

同 同  
静 岸  
々 香  
(1) (1)

同 同  
東 岸  
子 々  
(1) (1)

同 同  
三月十  
郎 都  
(1) (1)

同 同  
辰 始  
郎 始  
(1) (1)

同 同  
茶 始  
郎 始  
(1) (1)

同 同  
以 始  
郎 始  
(1) (1)

同 同  
賀 助  
峰 助  
(1) (1)

同 同  
幾 之  
子 助  
(1) (1)

同 同  
花 之  
村 子  
(1) (1)

同 同  
塊 人  
村 人  
(1) (1)

(昭和三十三年・自新年号・至十二月旬会) ——同点は発表順——  
謹賀新春  
竹原川柳会

<p>川柳雜誌社 明和病院支部</p> <p>西尾青一路 野呂鶏汀 橋高薫風子 河相すゝむ 徳永鬼美 吉本青風 瀬崎紫路 中橋川太郎 本城弦月 木田留三 副島夢人 富永夢路 酒井丹謡 野田霞路 塚田東雲 村上球絵 樋口舟遊 三上美路 松島光一 御園すみ江</p>	<p>謹賀新春</p> <p>西尾 葉</p> <p>大阪市南区西賑町 電話75五九六三番</p>	<p>川 雑 大鉄支部 天王寺支部</p> <p>大鉄局 笹木茂輔 正本水客 植村客遊子 松川杜的 吉原紅月 阿万万的 永尾永断 浅野瓢太 天王寺局 西浦一求 辻白溪子 高木 土佐太郎 間島青丹子 塚脇笑太 宮口笛生 野村初甫 堀須賀太</p>
---	---	--



# 全国の名物と 川柳行脚 (五)

## 水谷 竹 莊

駅を出る汽車の汽笛も十二

月

九州を一周している間にもう十

二月になった。旅をつづけていと四季のうつりかわりによって景色もかわる。その季節によって、名物の味もかわる。太平洋側と日本海側とは、同じ海の産物である魚も漁期に約一カ月ぐらゐの差があるし、味も違うようだ。その魚ばかりでない、全国の名産を居ながらにして味わえるところは東京である。

九州で朝とれた魚を飛行機でとりよせ、その日の昼にはたべさせるのも東京なればこそ出来る事である。

初松魚飛ぶや江戸橋日本橋 僕も今月号は九州から特急に乗って東京をたべ歩き東京の名物と川柳を味う事にする。

東京の料理屋の看板をみると、「江戸前」とか「関西料理」とかよく書いてある。この「江戸前」というのは、江戸に料理茶屋がで

きはじめてのは明和年間というから二百年程前からのことである。江戸から東京と名が変わった頃、商業都市として発達した大阪との交流がはげしくなるにつれ、大阪風の料理がどしどし入って来た。京都、大阪にくらべて新興都市の住人東京人には、東京、大阪、京都風と、料理を区別がつくはずもなく、ただたべた料理を、勝手に上方風だとか、関西料理だとか信じ込んでしまつて、今日なおそれをもつて通ぶっている人も少くないようだ。

関東大震災後は、大阪風料理が圧倒的に東京に進出していわゆる「関西料理」の全盛時代をつくつて「江戸前」は影がうすれた。それを江戸の子がだまつてみているわけはなかつた。これに対抗して「江戸前」と名乗る店も多く出来て、東京湾の魚も名産を回復したというわけ。しかし最近では江戸前も関西料理も、西洋料理を取り入れた戦後版日本料理のようなもの

が生れだしている。味の素をれじや魚が可哀相 恋のない箸にぎやかに喰べ 終り 潮花 食卓の下でチップを指で聞き 樹峰

## 浅草海苔

東京の名物としては浅草海苔だろ。これも現在では名だけで大森あたりや葛西方面の海岸にだけそのおもかけをとどめているにすぎない。海苔はともかく「浅草」と言う名が東京を代表する名所であり、名物でもある。

金龜山浅草寺本堂の一寸八分と伝えらるる秘物の顕著なる靈験によつて満都の人氣を集め江戸第一の繁昌を極むるに至つたのである。川柳でも、本堂の大伽藍に狩野洞春筆の天女が空に舞ふ絵が天井にあるので

天人が小田原町を覗き込み

古川柳

がある。

海苔を詠んだ古句では、海遠うして浅草で海苔を売

り 全盛の下でびしょびしょ海苔を取り

がある。全盛と云うのは品川の妓楼を詠んだのである。浅草海苔の名のあるのは昔浅草川(今の隅田川)で採取したからだと言われている。

## 東京天ぶら

天ぶら屋うしろも向かず口

叱言 三太郎

天ぶら屋閑だと見えて湯を沸し 甚雄

食ひ逃げもちよこちよこ有 幽王

つてよくはやり 幽王

外国人が「テンブラ」を好むことは戦後の東京風景のひとつである。日本料理として、天ぶらとす

きやきの名は世界に知れわたつてゐる。昔、天ぶらはゴマ油で揚げたものと相場がきまつていた。家庭で揚げる惣菜料理である精進揚げでも、ゴマ油でなければ食わな

いという江戸っ子もいた。ところが最近ではゴマ油だけでは揚げる色がわるい、味もこつて

りしている、色を美しくあとちのさっぱりした天ぶらがよいという好みの人が多くなつた。それで

ゴマ油に、椿、かや、オリブ、白綿、などが混ぜられて軽く白く揚がった天ぶらが普及しはじめ

た。今では外国人向きにサラダオ

イルで揚げる天ぶらをも自慢する店もあるそうだ。そしてまた何と何の油を何割ずつ混ぜたら、ほどよい天ぶらの味が出せるという油のミックスのしかたも、店の秘伝とするまでになつていっている店もある。タネは新鮮なものでないといけない。もともと東京に天ぶらが発達したのは、東京湾でとれる新しい小魚があつたためだが、今では関西、九州あたりからも盛んに入ってきている。うまいのは、エビ、ハゼ、キス、アナゴ、シラウオ、イカ、ワカサギ、貝柱などである

う。昔、天ぶらの一流店といわれたのは、天保二年の創業という最もおれんの古い新橋の「橋番」幕末の頃、静岡から出てきた中川清五郎が浅草に店を開いてから揚げを自慢にする「中清」、天つゆに砂糖を使わず独自の味をほこつて有名な「天金」、お座敷天ぶらで外人客を招待するに「花長」その外に今では一流の天ぶら店もぐんと増している。とくに本郷春木町の「天満佐」は店は小さいが静かであつて天ぶらを江戸流伝統の揚げ方でたべさせる自慢の店である。

名物の味は明治のままでよし 春 菓

江戸の灯に仕入の金をみな 夷 一郎

魚河岸のタンカで江戸の朝 清 司

# 柳界

# 展望

句会

▼本社新春句会は一月十二日(日)午後一時から下寺町光明寺で開催される多数出席を賜りたく句会部一同大ハッキリである。

▼杏林川柳会(大阪市)句会は十二月十七日午後七時半八幡筋峰月で開催。麻生護乃史出席▼大阪通信病院鳥ヶ辻川柳会(大阪市)句会は十二月七日(土)午後二時五階会議室で開催。麻生護乃史出席▼南海電鉄(大阪市)句会は十二月二十六日(木)午後六時半難波高架下で開催。路郎師選▼熊本川柳研究会主催新年懇親川柳大会は一月五日(日)正午熊本公会堂で開催。兼題「り出し」調子。曰く「付き・人工衛星、投げメチ一月三日。後援熊本日々新聞社・ラジオ熊本▼電電川柳(熊本市)忘年会は十二月十四日(土)午後一時熊本通信病院新館で開催。田中辰二氏の柳話があった▼川維高知支部は十二月一日正午忘年会を追手筋湖月で開催。盛會▼竹原川柳会(広島県)忘年会は十二月八日開催。盛會▼川維倉敷支部十二月句会は八月慈愛幼稚園で開催▼川維下関支部忘年会は十二月七日下関鉄道職員会館で開催。盛會▼岡山県下川維各支部連合忘年会は十二月十五日午後一時岡山第五鉄道寮で開催。盛會。

消息

▼武部香林氏(大阪市)は数カ月前より不幸眼疾に患はれ療養中不朽洞会員一同心痛して居るが最近余程回復に向い元気に通院視力回復に努力しつつある由▼番倉川柳社(大阪市)の同社五十年記念大会の打合せ委員会席上岸本水府氏ほか同人諸氏から寄せ書をわが社麻生路郎主幹に寄せられた

▼山田季賢氏(広島県)は本年一月以来川維本社句会へ遙々出席を続けられこの十二月句会まで全出席街道をばく進つてい目的を達せられた。同氏の本懐もさこそと編集部一同敬意を表している。なお十二月一日お子さん同伴山口県八代地方を旅行「八代の雀かけ足で見え戻り」の句信があった。

よろこび

▼黒川紫香氏(豊中市)長女マサミさんは去る十月廿九日華燭の典を挙げられた▼麻生一步氏(大阪市)は十月二十五日滝井貴美子さんと御婚儀を挙げられた。

慶弔

▼渡辺曉童氏(豊後県)父君は去る十月十日満八十四才で逝去哀悼。尙同氏は十月廿四日初孫をもうけられ悲しみの内にも悦びあり元気に公務に従事中的由。

▼本社洞友鳥山一步氏(西宮市)十二月十七日逝去十九日アベノ斎場で告別式。謹悼▲川維下関支部高橋こうたる氏(下関市)は十二月十六日永眠された。哀悼。

府)は十二月五日神戸市東灘区本山町岡本字宝蔵二四の新居へ移転

正誤

▼十一月号本社句会(瘦我慢張って実家を遠く住み)の句は鴨汀と訂正▼十一月号本社句会三十三頁札東八句目及三十四頁わさび二十句目を鴨汀と訂正。(梅)

不朽洞 十二月一日午後三時から浜寺諏訪

会から 森の中島生々庵氏邸で本年度理事総会を開催。出席(敬称略) 藤乃・生々庵・小石・阿茶・文蝶・古方・潮花・春巢・梅志・梅里・山茶花・紫香・いさむ・いわを・摩天郎・恒明・没食子・水客・賀峰・栗・好郎・多久志の諸氏。

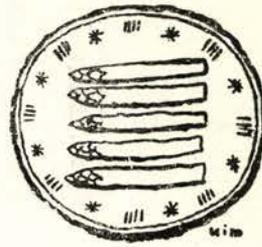
川村副理事長司会により多久志副理事長より本年度事業報告あり栗理事長が議長席につき左の件々を審議した。一、不朽洞会員の一部会費変更の件。二、入退会者の措置を適確にする件。三、研究会会創設の件(古方氏担当)四、A・B地区理事増員の件(新理事、須崎豆秋氏・吉田圭井堂氏・榎並夏六氏・福田了路氏・西尾青一路氏)五、不朽洞会バツジ作成の件六、不朽洞会々員総会開催の件(三月上旬開催)七、欠員中の本社副主幹推せん(中島生々庵氏が就任受諾)以上。引続き懇親宴が催された。

退会

船曳吞張氏は家事の都合で十二月限り退会。森文夫氏・多胡春洋氏十一月限り退会。(多)

<p>謹賀新年</p> <p>大阪通信病院</p> <p>鳥ヶ辻川柳会</p> <p>尾崎方正 橋本幸男 市場没食子 西辻竹青 水谷ハナ子 榎木喜男 仲谷ハナ子 小野木凡平 小沢史葉 生越正徳 若林草右 真野康彦 森下愛論 乾 静夫 池戸桃村 乾 静夫 足立春雄 北川春巢</p>		<p>喜寿となる元旦 みんな笑い顔</p> <p>中島紫痴郎</p> <p>信州湯田中温泉</p>
<p>川柳雑誌社鳥取支部</p> <p>鳥取川柳会一同</p>		<p>小児科・沢田医院</p> <p>沢田四郎作</p> <p>大阪市西成区玉出 本通り一ノ一三</p>
<p>交通局川柳会</p> <p>北川 春巢 富岡 淡舟 児島与呂志 浜畑 胡蝶 福島 正則 松岡 茶々坊 森 文天 米虫 一の字 岡島 孤舟 橋本 雅巢</p>		<p>川雑篠山支部</p> <p>大安 一風 岡沢 凡志 河原みのる 小西 無鬼 酒井ひか平 寺山 喜天 遠山 一雨 藤本 豊 前川 左文字 前川 越山</p>

# 一路集



## 松江梅里選

詳細なメモが決め手になる不寛  
鬼美  
メモ持って買物をする目出度い日 兼治郎  
饒舌をメモでまとめて聞き流し 葉光  
古伝票もメモ代りして社は黒字 勝三  
ボンクスの前でいららしてるメモ 辰始  
表紙までメモにしている電話帳 淀月  
読みとれぬ符号も交せて妻のメモ 井蛙  
メモをする筈の車中を立ちつけ 悦子  
見られては困るメモには妻強氣 豊年  
メモ通り事を運べと旅に発ち 仲字呂  
私生活つぶさにメモをとって老い 芳仙  
メモすると云うたに電話切れて居り 俊見  
陳情は聞きおくだけでメモにせず 恒雄  
逢う場所をメモで受取る女事務 圭井堂  
さてなんのことやら本人だけのメモ 三四郎  
二重丸ついた妓のメモにされ 与呂志

重役もラジオのクイズメモにとり  
秀才  
如才ない秘書でいらいちメモをつけ  
鴨汀  
メモと金落さぬ様にと子の使い  
珍ちく  
頭にちやんとメモしてあると仰せられ  
虹要  
酔うた振りして女給のメモ確か  
宗太郎  
メモの手も動かさず駈出し気がつかれ  
狂二  
大東京メモを頼りに来て迷い  
一鶴  
洗濯機それだけ消した妻のメモ  
木魚  
原因はメモしておいた女給の名  
さんたく  
外開を憚かるメモは胸に秘め  
静馬  
源氏名のメモを女房にとがめられ  
梢月  
いささかの借りも事務長メモをとり  
味平  
メモにする習慣がありすぐ忘れ  
愛鳩  
メモ一枚破って住所書いてくれ  
洛酔  
共稼ぎ晩業メモで知らして来  
舟遊  
うかつにもメモ法廷へ持ち出され  
堅持  
メモ通り作って別な味になり  
実男  
メモにすりや使えぬものを役所焼く  
芳郎  
メモメモ記事はここから生れてる  
笑太  
メモを見て暖一つしてまた続け  
雄声  
メモされた安心感で受験する  
吟平  
育児講習ワザ泣かしてメモをとり  
葵丘  
講演のメモうけ売りをするつもり  
蜻蛉  
用件がすめば哀れなメモとなり  
祥月  
辻褄を合してメモを清書する  
一雨  
メモにだけ書いて相談には乗らず  
春雄  
電話室壁一つばいがメモになり  
幽谷  
メモ通り尋ねて露次で行詰り  
凡倉  
メモからの記事を流れるように書き  
一十  
来客に注意をしろとメモが来る  
義夫  
メモしてたことを忘れてたお詫び  
九呂平  
ちり紙のメモをすかして考える  
八九寸  
上役はメモを残してもう帰る  
むじな  
妥協したメモを取めて酒になり  
昌男  
その筋に秘密のメモを押えられ  
たけお  
奥さんのメモが狂うていた日付け  
代仕男  
メモしときなはれやと女房口を出し  
よし子  
メモに明けてメモに暮れる記者稼業  
秋月  
秘書のメモちよつと覗いてみたくなり  
忠三  
メモ帳のK子K子にこだわられ  
好子  
メモぐらいしとかんかいなと叱られる  
庸佑  
先生の話へメモが追いつけず  
連  
二重帳簿にのせる金額メモしとき  
七面山  
保存期が済んで格下げメモになり  
巖  
呼出しの電話へメモを持って出る  
十九平  
メモをとることにも慣れて記者の妻  
伊津志  
デパートへ行くメモ姑のもの書き  
恵二朗  
ロボット社長メモの通りに動かされ  
同  
大ギヤングのメモを新聞聞か合い  
沙智子  
メモ帖にがてんの行かぬページ  
同  
ドブ酒の製造法もあり祖父のメモ  
藤波  
もろもろの秘伝とコツの備忘録  
同  
菊千代と秘書はひそかにメモしとき  
牧人  
制勘の内訳メモにして幹事  
同  
鶏三羽飼つて卵の殻にメモ  
光郎  
台所の黒板今日秋刀魚の日  
同  
地図書いてもうたメモを忘れて来  
雄々  
鉛筆の芯があわてて折れるメモ  
同  
時間だけメモに書かれた結び文  
高志  
電話口メモメモモモと言う手つき  
同  
メモ込めに財布拘られて舞戻り  
夜潮  
旅立つ子メモへ土産を書きつらね  
同  
賛成を求めメモで阿弥陀籤  
凡茶  
見たと言う判までついておいて欠  
同  
外人のメモへ四五人首を振り  
同  
陽子

## 川柳に使われる文字 不二田一三夫

「書」この一字で、「書く」とか「書き」と読ませるのがありますが、これは「書」の下へ「く」又は「き」がないと読みにくいと思います。

ちよつとだけよろけて  
みたいネオンの灯

これを「一寸だけよろけて見たい」とも書けますが、「一寸」を今日なお「ちよつと」と読ますのはどうでしょうか。一寸の次の文字を読むまでは、「一寸」か「ちよつと」か、わからぬようでは困ると思うのです。上を読み下を読みせぬと句意がわからぬ不便さを出来得るかぎり排除したいものです。中七の「よろけて見たい」の「見」は、この場合は「み」が正しく、見を使うのは、眼で見る場合だけのものだと思っていま

品質優良  
**先カペン**  
TACHIKAWA PEN

カペン  
ワゼム  
カワ  
チカ  
タチ  
タチ

大阪市東区常盤町一丁目十一番地  
立川ペン先株式会社

(佳)重役のメモ鑿慮と株のこと 代仕男  
 (佳)警官のメモへ偽名が出て来ない 漣  
 (佳)拘摸ある日世帯のしみたメモを拘り 恵二朗  
 (人)思出し笑いでメモを破いたり 不二  
 (地)十二月メモに書き込むことばかり 木魚  
 (天)自分しか読めないメモで儲りて居 万古人  
 (軸)先附けの額をメモしたまま忘れ

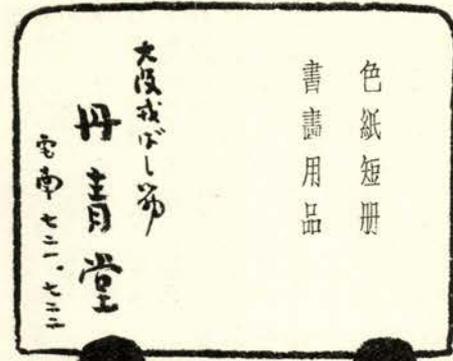
# 寄附

## 田中鳥雀選

寄附集めしんどまつせと貰てから 高志  
 功成つて寄附筆頭に名をつらね どんたく  
 先生が僕にやさしい寄附の額 実男  
 寄附らしい顔が社長に御面会 むじな  
 寄附金は近所の通り出して置き 秀三  
 半分は寄附で建つて設計書 昌男  
 御近所が額を揃えた奉加帳 仲字呂  
 町内の寄附三十円もあつてよし 舟遊  
 パトロンを匿名寄附の間にし 雄々  
 寄附帳のトップに書いた議員の名 秋月  
 倅せは寄附を出す身で今日暮れ 鬼美  
 売名とはつきり判る寄附も見え 勝三  
 お隣のことも知らせてくれる寄附 木魚  
 表彰の金其まんま寄附に出し 晃康  
 気持だけと云われて気持だけの寄附 牧人  
 信仰が少し下火か寄附帖回つて来 周甫  
 井戸端でまとめられたる寄附の額 高史  
 警察の宴会寄附の酒があり 鶴汀  
 寄附帳が捜しあぐねたペンキも 一進  
 有難い寄附は家族の名を連らね 一十  
 種刈が済んだ処へ寺の寄附 初甫  
 此の次の選挙を意識しての寄附 不二

寄附金を二次会で飲むほろにがき 守株漢  
 高か低くの二冊寄附帳があり 魁光  
 名前だけ書いて気前のよき寄附帖 よし子  
 野球部の寄附は社長へ先ず廻し 義夫  
 お隣と口を合せた寄附の額 陽子  
 去年並などとううで決める寄附 凡茶  
 寄附をした金で呑んでる 村祭 梢月  
 断れぬ事情を知つた寄附が来る 忠三  
 神様も寄附貼り出して抜目なし 無名  
 神様は寄附を頼りに鎮まりぬ 一雨  
 天の邪鬼寄附の相談こじれさせ 光郎  
 孤児の身へ人の情の金が寄り 美音子  
 酒だけは寄附ではずんだ慰安会 丹誦  
 大口の寄附から先へまわつて来 庸佑  
 前線つて見て寄附金の多寡を決め 堅持  
 額間わず可憐な手紙添えた寄附 狂二  
 野心あり郷里の寄附を派手にする たけお  
 寄附帳は一通り見て筆を舐め 豊年  
 寄附帳へ言い分けの墨をすり 古心  
 御近所の噂にもふれ寄附の額 漣  
 寄附順と一目で判る座の寒く 惠二朗  
 母校への寄附一口は弗で来る 幽谷  
 小銭のみ列べた寄附の憐れなり 夜潮  
 トップでは困ると寄附に御謙遜 悦子  
 落選へイタンカニシの寄附が来る 十七  
 匿名の一灯もあり鐘供養 藤波  
 寄附金のことと徹夜が続く村 代仕男  
 寄附帳へことわり難い顔がくる 愛鳩  
 匿名で出た寄附の名を知りたがり 雄声  
 事寄附に関し同権云わぬなり 俊見  
 来年は選挙祭へ寄附の高吟平  
 会長がついに自腹を切つた寄附 葵丘  
 寄附帳を趣旨は結構だが伏せ 凡倉  
 老眼鏡持つて来させてケチな寄附 与呂志

御自由の管の御寄附に粹があり 七面山  
 寄附集め地理にくわしいのがまじり 巖  
 大口の寄附玉垣の親柱 淀月  
 筆頭は一金とだけ奉加帳 八九寸  
 強請はせぬ寄附五人連れて来る 葉光  
 算盤をはじいたほどに寄附よらず 一鶴  
 擦みに擦み寄附は子供に持参させ 辰始  
 寄附帖の第一欄を敬遠す 蜻蛉  
 子の出来が悪く学校へ寄附をする 葉光  
 宏壮な構えで寄附を寄せつけず 圭井堂  
 極楽へやらせて貰う寄附をする 恒雄  
 (佳)寄附金のことと世話役投書され 宗太郎  
 (佳)公民館ブラジルからの寄附で建て 定月  
 (佳)寄附帖が糞を正した門構え 芳仙  
 (佳)よつぽどの寄附お神輿が寄つて行き 沙智子  
 (佳)寄附をした証拠折詰下げており 野狸翁  
 (佳)死んだ子の名前で寺へ寄附をする 十九平  
 (人)裏通り祭の寄附でまた拗ねる 実男  
 (地)広分の寄附を覚悟で主張する 三四郎  
 (天)優勝をして来た寄附で言い易し 牧人  
 (軸)尼寺に寄附はり込んで疑われ



す。「犬にはえ付かれ」は「つかれ」が正しいでしょう。「雨が降り出した」も、出たのではないから「でた」とするべきでしょう。

「今日」と書けば「こんにち」で「きよう」と読ますなら、カナにしたいものです。それから、川柳に一番よく使われる「酒を呑む」は、「飲む」でないといけないと思います。「湯呑茶碗」「話を呑み込んだ」「あの人は呑んべえだ」という場合は「呑」でいいでしょうが「酒呑み」とは人を指し、「酒飲み」とは意味が違うように思っています。

「あのように」を「あの様に」というのが相当多いようですが、私は「様」を書かぬようにしております。私自身よく文字を間違えるので、うちの娘たちにときどき教えてもらうことにしています。たとえば「句生れる」と、それを見せて、「お父さん、この『なる丈』って、何んのこと？」ときかれたら「なるだけ」とすぐ書き直すことにしています。

「ハンドバッグ」または「ベツト」とある場合、それを「ハンドバグ」または「ベツド」と訂正すると、句の調子がこわれることもあると思いますが、こういうのはどうしたらよいか判断に苦しみます。路郎先生は日頃から、原句は尊重せよと申されています。

新カナづかひもなかなかむつかしく、完全に新カナになってる柳誌にはまだお目にかかっていません。「近づく」を「近づく」と間違えるのが多いようです。この厄介きわまる日本字に、われわれはどれだけ時間的に損をしているかわかりませんが、川柳が、なにか古風なものに感じるの、やはり文字の使い方に原因するのではないでしょうか。

いのちある句を創れ



▼用紙は原稿用紙▼文字は正  
確▼締切毎月二〇日▼投稿先  
本社宛

本社 忘年川柳大會 (大阪市)

12月8日 午後1時

於 光明寺

光明寺の日本間から見る庭園の樹々の色はやはり冬のものである。こうして一年中見ていると、四季の移り変りがその葉の色でわかるのが本会場の楽しさでもある。西尾栗氏の挨拶から、川柳座の顔見世の幕が花々しく開く。大入袋が出そうな盛況である。路郎先生のご病名とアイクが同じだったことをユーモラスな舌のせ、先生へのお見舞はリンゴよりの盛況であると結ばれる。

中島生々庵医博が、これは四時間前の先生のお声だと前置されてテープ・レコーダーが回る。先生のしつかりした親しみのある、あの声がわれわれに三ヵ月ぶりに話しかけられた。医師のことばをよく守って今のところ酒も飲まずにこれ全快にとめておられるので、新春句会にはご出席が期待される。声のご出席だけでも私達はうれしかった。

川村好郎氏の柳話は、ラジオのバタ屋の現地ルポから、師走らしい話題を氏一流の舌にのせられる。ゴミ箱は宝の箱であるというバタ屋哲学も一つの発見である。この社会にはゴミがある限り失業のないのもおもしろい話であった。川柳塔精勤者中、早川清生氏は年間一二三句抜

け、月平均十句強というスバラシさを紹介された。

雪月花戦はホワイトリボンが優勝。支部対抗戦は群雄をなで斬り、今巴御前ぶりを示された「みおつくし」の藤村梨花さん堂々の優勝。「豊中支部」の菊田いさむ氏が準優勝された。

フイナールを飾る不朽洞賞杯は、不二田一三夫氏が握り、ために決戦は新春句会へ持越しとなった。なおお同会場で忘年懇親宴が和やかに第二幕目を開けた。

(F)

- 出席者 紫香・句念坊・淡舟・いさむ
- ・与呂志・昌男・美恵子・春翠・圭井堂
- ・黙平・水客・狂二・千里・阿茶・笛生
- ・文秋・旅風・井平・花車・十悟・きさ
- 子・潮花・多久志・三司・洛風・水堂
- ・山舟・雄声・月都・六童子・辰始
- ・豆秋・清人・高史・葉・みゆる・葉平
- ・鶴汀・黒天子・留三・東雲・素人・生々
- 庵・捨三・梅里・葉光・須賀太・舟遊
- ・一瓢・茶仏・一三夫・梅志・梨花・孝江
- ・繁雄・薫風子・利武・雄峯・好郎・省
- 三・奈良子・博也・雅楽・一求・庸佑
- 古方・進之助・葉乙女・季贊・鳩花・牧
- 人・晃・どんたく・楽天・柳宏子・瓢太
- ・澁月・貴山・悟朝・いわを・春果・す
- すむ・省吾・愛二・宏子・霞乃

兼題「日本間」 麻生霞乃選

日本間で生まれ育ちの国で老い 扇子仙  
青い眼の足がフラット見せてきた茶室 美恵子  
日本間もテラツト見せている唇屋 好郎  
七階に日本間もあるビルの窓 葉平  
床の間の軸かけ変え部屋は新春 潮花  
日本間でないと何にも手につかず 阿茶  
日本間は欄間の彫りに粋を見せ 留三  
日本間の炬燵へ通す女客 阿茶  
日本間の軒の深さもうれしくて 古方  
日本間へスリッパ履いて行く暮し いさむ

客間だけ表替えして師走来る 瓢太

日本間はこれから寒い炭をつぎ 茶仏  
としよりの意見へ和室も一間建て 奈良子  
初釜の香りただよう青畳 進之助  
日本間で袴の似合う人と居て きさ子  
日本間で食う洋食は箸を添え 三司  
日本間にバスもトイレもある旅館 千里  
日本間のクイックスロー妻を抱き 越舟  
くつろぎは日本間にする旅靴 みのる  
日本間も洋間も新婚さんで混み 雄峰  
接待を済ませ落着く四畳半 井平  
日本間の前は鴨川東山 素人  
女中部屋だけが日本間という暮し すゝむ  
デザートに日本間あり茶の稽古 一十  
日本間へベッドを置いた新夫婦 陽谷  
母連れたホテルは日本間を選び 留三  
呑兵衛の宴会日本間所望する 留三  
スリッパのまま日本間をかける 一十  
齢四十日本間に合う絵を習い 葉

日本間へ通すお客は儲け口 多久志  
日本間へ客を通して妻はバフ たつよ  
こへこう日本間をとる青写真 十悟  
日本間でないと寝こええい言う 季秋  
床の間も蛍光灯の色になり 豆  
日本間のテレビは床へまわり上げ 春菓  
忘年会日本間だけは予約すみ 知恵美  
日本間をグラントピノ広がり 美音子  
掛軸をはずしベッドに掛けた音 茶の香  
日本間の鉄は花を切った音 潮花  
日本間の方へ女は脱ぎに行き 省三  
日本間へ主人も脱めぬ軸を掛け 一三夫  
日本間は霞責に替わる倉をあけ 霞乃

豊年はまだ食卓へ届きかね 幽谷  
食卓の最後はひとり母の朝 昌男  
食卓へ妻と夜なべの紙を敷き 洛風  
独り者食卓出さぬ日が続き 鶴汀  
主賓まだ見えず食卓お茶を替え 昌男  
食卓へつくまで愚痴を蓄めて置き 十悟  
食卓に僕の誕生教えられ 花車  
食卓のたった一人を待ちわびる 紫香  
食卓に先に食べてと置手紙 貴山  
家計簿も見せて食卓うなずかせ 瀧  
食卓に一人欠けてる受験の子 高史  
寒の入り食卓にある 葱の青 葉平  
食卓に蔭膳もあり淋しい日 柳宏子  
食卓の笑い貧しさなど言わず 牧人  
食卓を今日は四角に見る見合 失名  
食卓の古きを気付け旅席えり 旅風  
漢かんで来いと食卓立たされる 圭井堂  
食卓の鯛は土産へ飾るだけ 一三夫  
食卓はふきんをかかけたまま一時 芙蓉路  
食卓へ運んで女房ひとり食べ 満秋  
食卓の話題に父がしどろもど 茶仏  
食卓のふきんへすまぬ朝顔えり 千里  
食卓へも一人戻るきれを留守 省三  
食卓に花添えてある母の留守 奈良子  
夜の食卓ひっそりとして妻起きず 瓢太  
一本の無い食卓の寒さかな さんたく  
食卓へぎつちよは皿を置きかえる 一三夫  
すねた子の茶碗が伏せたまにあり 水客  
半世紀この食卓で子も育て 旅風

兼題「食卓」 中島生々庵選

食卓の下からチップ握られ 花車  
食卓へ坐り直した燭がつき 昌男  
永病んで食卓遠く弱すする 楽天  
食卓の母は斜めに席をとり 十悟  
ビールから食卓の花邪魔にされ 瀧  
食卓の花も会費の内にあり 句念坊

兼題「苦笑」 須崎豆秋選

苦笑したことで巡査にからまれる 圭井堂  
下駄の歯で踏まれ男の苦笑い 知恵美  
花柳病看護婦傍で苦笑する 句念坊  
横綱は土俵を割って苦笑い 素人  
カリブンを喰う坊やへババ苦笑 奈良子  
苦が笑いて特売場の妻を待ち 博也  
苦笑して特売場の妻を待ち 牧人  
苦笑い隣は倍も餅をつき 十悟  
スポンジと知った乳房へ苦笑する 三司

苦笑いして皮微科へ通い 栗  
 子に負けた将棋へ父の苦笑い 雄声  
 苦笑して女の嘘に逆らわず 薫風子  
 内風呂で転んで独り笑うとき 水客  
 商談がもれて苦笑して別れ 淀月  
 職務鞆の電話を切つて苦笑い 繁雄  
 苦笑するたんびに顔を歪めくせ 半男  
 苦笑する上役思ひ当るふし 昌男  
 虫のよい願ひの神様苦笑い 美恵子  
 苦笑する鼻から吐いた煙草の輪 春翠  
 苦笑して外れた籤を千切り捨て 牧人  
 榮転は噂ですんだ苦笑い 多久志  
 産制をもれた五男へ苦笑い 梅志  
 にが笑いして答案の白を出し 好郎  
 先妻とばかり逢うた苦笑い 一求  
 苦笑するだけの夫で氣に入らず 昌男  
 苦笑する鏡の僕がふと僧い 新三夫  
 新聞の漫画へ大臣苦笑する 一三夫  
 苦笑とは公益社の年賀状 みのる  
 見送りへ左邊は苦笑して別れ 幽谷  
 苦笑して長いものはまかれる氣 雄峰  
 苦笑いかすかに見せた片えくぼ 阿茶  
 苦笑いしながらのろけ聞いちゃり 豆秋

兼題「大入」 正本水客選

大入袋おしいたいた立女形 葉光  
 大入りへ売店ほりこりあびただけ 好郎  
 顔見世にもう札止めのぢらを貼り 梅里  
 大入りへアベツクさつと廻れ右 水鏡子  
 大入りの追善一層淋しけれ 舟遊  
 大入りへアノ喚声を聴けよといふ 春堂  
 大入りの雲開ケてラジオよく喋り 水菓  
 大入りの中を木戸まで呼び出され 茶仏  
 大入りの祝儀が奈落までとどき 潮花  
 大入りを押し出すようには太鼓 潮花  
 大入りへ高い調子の下座囃 牧人  
 大入袋中味も見ずにしまいこみ 古方  
 腹立てて大入袋落してき 水客

庶題「猫」 北川春巢選

まねき猫いがんだまん金庫空ら 好郎  
 可憂さのあまり引張る猫のひげ 淀月  
 猫の子を拾って帰える父無し子 狂二  
 妾宅の猫鼠を取つてしかられる 素人  
 世智辛く割鯉で子猫行く 平佑  
 不注意で猫にとられたと言ひず 照光  
 捨てられていた猫子約される猫 平光  
 メス猫のたしなみ食後の貌洗う 葉風  
 猫に物言うて女の独り住み 旅風  
 御多忙の足元猫が邪魔しに来 十悟  
 名月を観に出たままのうちの猫 季贊  
 電気コタツ猫は月賦と知つていず 素人  
 二人寝るコタツで猫がくみする 洛風  
 美食する猫はねずみへふりむかず 司風  
 死の灰もセシユームも知らぬ猫の恋 十悟  
 閉古鳥な猫いて店に猫と守り 水客  
 ベルシヤ猫抱いて夫人の座は守り 雅巢  
 もう猫が要らなくなつたラプシオン どんたく  
 猫追えばカリブソ娘の眼でにらみ 水客  
 逢引をするのか猫がやつして居 雄峰  
 押し売りに猫まに合わぬのをみる 紫香  
 猫はめてすまじきものは宮仕え 省三  
 如才なく子猫ももろうて帰るなり 紫香  
 子のない畳は猫がよくすなり 春巢

坊ちやんが又犬の子を拾つて来 梅志  
 マゴトを好く坊ちやんはきよしや育ち 黙平  
 坊ちやんらしい商売のラケット屋 葉平  
 坊ちやんが一人ストには加りませぬ 狂二  
 坊ちやんと言ふ学校の小さいボス 阿茶  
 坊ちやんはもうやめてくれ売けかき 飄太  
 坊ちやんの善意は金ですむ氣で心 美恵子  
 幸せに倦き坊ちやんの出来心 飄太  
 本当の坊ちやんを知る女中が居 梅志  
 泣き出してから坊ちやん強くなり 潮花  
 坊ちやんを迎えに行ける雨が降り 潮花  
 お坊ちやんの抵抗石を蹴つただけ 三司  
 坊ちやんと呼ばれた御蔭苦勞する 句念坊  
 お妾と知らず坊ちやん手を握り 茶仏  
 坊ちやんの玩具になつてゐる小大 豆秋  
 だます氣の坊ちやんがもう忘れられ 貴山  
 前だれを付けて坊ちやんという威敵 貴山  
 瘦我博張つて坊ちやん眼鏡拭き 山生  
 坊ちやんの自信に押されて帰つて来 水客  
 坊ちやんを流かして丁稚も泣いて居り 水客  
 坊ちやんの抱負は恐いことを言つ 旅風  
 坊ちやんもふと抵抗をしてみたく 水客  
 割勘というのが坊ちやん大嫌い いさむ  
 坊ちやんがわめかす大も尾をたれて 梅志  
 坊ちやんの恋はほんまにやんなさう きさ子  
 坊ちやんが邪魔して困るかなな屑 素人  
 鬼ごっこ坊ちやん鬼で日が沈み 豆秋  
 坊ちやんは最初の女中忘れ兼ね 花車  
 坊ちやんがよつしやとユース替えてくれ 東雲  
 坊ちやんといわずに妓ろく逃げ 古方

庶題「道草」 真鍋一瓢選

道草へ少女殺しの記事を見せ 一三夫  
 道草は次週の写真隅から見 一三夫  
 道草に頼まれは長いのを忘れ 黙平  
 道草も食わず四十を平でいる 淀月  
 道草をバスの故障にして帰り 柳宏子  
 道草が過ぎて借傘して帰り 黙平  
 道草は泣かされてから戻つて来 紫香  
 道草の楽しさ靴が鳴つてゐる 水客

川維 ハワイ支部句会 (ハワイ)

配達のついでにのぞく紙芝居 千里  
 つもり出した雪へ学校がそりの児 笛生  
 ポーナスの日の道草は折を提げ 牧人  
 道草をしたたか妻にヒスされる 生々庵  
 ランドセル道草して来た砂が落ち 漣  
 道草はおき忘れたこと言ひをびれ 阿茶  
 道草も喰わず停年まで走り 一求  
 道草の小遣銭がちと足らず いさむ  
 たこ焼をほほばり道草帰つて来 貴山  
 道草のところをママになる伝記 古方  
 香具師の腫に道草らしい子が並び 六龍子  
 市場籠又持ちかえて立話 葉光  
 道草にしてはおそいと案じ出し 梅志  
 草詣りした道草が目だのこり 文秋  
 草野球見ててお使いまだ済まず いさむ  
 道草のふと雲行が氣にかかり 紫香  
 夕焼けを背に道草戻つて来 三司  
 赤垣へまた道草の十二月 十悟  
 叱られるのを忘れ香具師に寄り 雄峰  
 道草の子に小羊が鳴いてみせ 進之助  
 道草がこんな五十のたよりなき おみやげが半分減つたまわり道 進之助  
 道草のわけは母だけ知つてくれ 漣月



築山快夢起選 周防 黒潮 浪之助  
 アイカ子も罪は戦犯繩がつき 周防  
 犬に噛まれるアイカ子を思ひだし 黒潮  
 アイカ子にまじつて二号焼香し 浪之助  
 アイカ子と撮つた写真のなつかしき 浪之助

アイカ子の見舞を涙で嬉しがり 風草  
 選挙前皆アイカ子にして仕舞い 紅茶  
 アイカ子の顔も分らハッパイコ いつ生  
 立板に水のアイカ子さらり逃げ 旋風  
 落ちぶれてアイカ子の教急せへり 十吉

選曆の祝辞アイカ子 国訛り 眩月  
 アイカ子を呑んで唄うてヌイヌイアロハ  
 すき鍋へ丸くアイカ子輪を描き 泉水  
 奥さんの前をアイカ子だしにされ 銀水  
 アイカ子と云うて言われて欺し合ひ 既美子  
 アイカ子の親の代から子に続き 笑流  
 アイカ子の交り嫁もとり 交し 北海  
 浮き沈みアイカ子続く半世紀 砂丘  
 ホーハナのアイカ子今は良い暮し 拜山  
 酒癖の悪さへアイカ子訛りて 迷朗  
 アイカ子も古く移民の同 回船 草一郎  
 落ちぶれて飲みアイカ子は消えて行く 柳葉  
 アイカ子は楽し余生をうるおわせ 笑有  
 アイカ子と寄って明治の声になり 斧平  
 ライバルでありアイカ子である不倅 魔法麗  
 実の無いアイカ子呑む時だけに来る エス子  
 アイカ子と呼ぶ社長は氣に入らず 快夢起  
 「ハツパイコ」は砂糖黍を切つたのを車  
 へ運ぶこと。(土人語)「ヌイヌイ」は  
 充分の意。「アロハ」は親善。「ホーハ  
 ナ」は鐵。「ハナ」は鶴くの略語。「ア  
 イカ子」は当地の日本酒名。(土人語で  
 親友の意)

川維 淀川支部句会 (大阪市)

武部 香林 選

民謡と浪曲ダイヤルろろろし 十七  
 民謡へ音痴も切れ切れついでゆき さぎ子  
 民謡のうまい年増が見直され 多久志  
 旅便り民謡なども書いて出し 陽子  
 子に希望託して生きている未亡人 三十郎  
 ニエコンになつて希望持ちつつ 東洋男  
 希望の灯ともしつづけて畑を打ち 葵丘  
 子の希望についてゆけない手内職 水堂  
 ニエコンスタイル追は月賦がつきまとい 幽谷  
 スタイルが親の好みに折合わず 花村  
 文士スタイル三尺帯がすれており 若菜  
 美しいスタイルオプイスなんて嫌 香林  
 ぶつきらばうのスタイルで来るアルバイト

川維 玉造支部句会 (大阪市)

徳永 雅美 報

桜炭旦那のうわき聞かされる 六龍子  
 灰になるまでと苦勞の池田炭 井平  
 こんな音しますと炭屋の田代 凡九郎  
 炭焼きは狸のように這うたいて見 雅美  
 小娘がでつかいニエコンの種をまき 栄治郎  
 辛らかつたけれど話の種となり 一栄  
 待遠しい種へ親子が水をやり 登志子  
 種子物屋咲かした様に云々売り 貞旬朗  
 種袋八寸咲きの花を描き 文秋

川維 にしなり支部句会 (大阪市)

後藤 梅志 選

十円のみよこ二日とよう生きず 逸人  
 荷車のどこかでひよこ鳴いて居り 五色  
 折角のみみずをひよこ持てあまし 漣  
 顔中を口にひよこ餅をねだり 旅風  
 二坪の庭がひよこの天地にて 晁  
 投げ餅へかかも器用な象の鼻 六龍子  
 鼻先で軽く失態したという 利幸  
 目鼻立ととのい過ぎて親しめず 文秋  
 誕生へエプロンみんな寄つてくる 笑司  
 又女でしたと逢う度云っている 敏子  
 誕生日年々鯛の小いそなり 句念坊  
 十二月三十一日産気づき 豆秋  
 誕生日柱のきずは親を越し 歌子  
 あねさんの晴着で妹まにあわし 梅蘭  
 やりくりも三十年の顔のしわ 梅志

川維 京都支部句会 (京都市)

田中 烏雀 報

兎車ベルを聞く花嫁とはなりぬ ゆきら  
 男の女の別れる縁をさする 豊次  
 浅智恵の瞳を足元に落すだけ 際  
 東洋のゴツホ清の登場 親生  
 落葉の音に重つた冬が登場して 篤子  
 ズルチンの甘さ悲しき時代かな 鳥雀  
 私生活お櫃の蓋をしめ忘れ 司郎  
 私生活に教師の位置を淋しとす 正面子  
 どてら着てからをネロのごとく居る 花笛  
 私生活パンとミルクで今日暮れ 九角

川維 広島支部句会 (広島市)

アルバムのコーナーに僕の私生活 晴芽

秋風に夏のロマンス実を結び 吐川  
 構想を耳打ちされる会議前 寛水  
 金の要るところで構想行き詰り 二三夫  
 構想の父母には済まぬ道を選び 一荷  
 せつかちはお顔に惚れた恋を悔い 秀月  
 せつかちな娘ドライと間違われ 川然  
 秋風に服の月賦は一回避目 方利  
 灯びが川面にゆれて人を待ち 上利  
 構想は予算の枠にちぢめられ 越舟  
 せつかちに叱つた顔が恐縮し 俊生  
 忘れもの取りに戻つてまた忘れ 見生  
 せつかちの妻にかき餅まかせられ 裸像  
 落付いた人にせつかち尙あせり 休半  
 赤い羽根ゆれるラッシュの秋の風 半休  
 せつかちの電話言うだけ言うて切り

川維 備前支部句会 (岡山県)

浜田 久米 雄 報

紋付の顔吉凶がはばわり 久米雄  
 告白へ酒の力を少し借り 柳風子  
 酔うてからした告白を疑われ 伊久野  
 意見する父が先祖のことにふれ 正州  
 告白の沈む心へむちを打ち 幸仙  
 精農に字間好きな子が揃い 万女  
 難題を出して土曜の授業終え 一仙  
 精農はとりの草も気にかかり 幽谷  
 精農は草を探して草をとる 陽子  
 先祖から商人ですと抜目ない 葵丘  
 精農家一人ボンチで碑を抜き 竜泉  
 方言が巾をきかせる綴り方 夢城  
 精農に聞いた通りに種をまき 東岸子  
 精農であつた祖先を持ち出され あやめ  
 告白の途中涙をふいてやり 永流  
 紋付が唄い背広を手をたたき 承平  
 難題がとけて屈託ない寐息 流風  
 精農の胸算用がちと狂い 嬬句楽  
 うす気味の悪い告白されて居り 清春

川維 米子支部句会 (米子市)

小西 雄々 報

裏木戸が外泊毎に重くなり 芋人  
 外泊につのが出手が出火花も出 奎  
 外泊も気にせぬ妻に嫉けている 君枝  
 外泊の母へ子供は行きたがり 美喜江  
 外泊のスリルやつぱり気がとがめ 天邪鬼  
 外泊が楽しくなつて世帯廻せ 青春  
 出張と言う名で外泊して帰る 一子  
 三次会以後は道路に外泊し 散機  
 外泊は酒の力をかりて寝る 無閑  
 外泊の妻の電話に起こされる 散歩  
 外泊へ妻は無口の背で抗議 春秋  
 外泊は一生忘れぬハネムーン 素飄  
 よろめきは外泊先の誘いから 吾柳  
 外泊の女それから気が変り 詩郎  
 外泊の土産にまどう安サラー 秀峰

お知らせ  
 バックナンバー御入用の方は、往復  
 ハガキでお問合せ下さい。  
 川柳雑誌社

凸版・写英版  
 技術を誇る

親切で早い  
 四部 台木部  
 一書作業

東洋写真製版所  
 大阪府河内郡西宮市南中2-6 電話(66)3633-9782

外泊をしてからママの眼が違ひ 庄太  
外泊と知らず毛糸を編み続け しげる  
外泊をして女房のこわざ知る 雄々  
横綱の不運初日に土俵わり新雪

川維 下関支部句会 (下関市)

石川侃流洞報

打ち開けて胸青空のようにすき 吐泉  
青空に豊作の鎌よく研がれ 伊三男  
眼の届く限り瑞穂の国の秋 竹涼  
青空へ守りを任せて妻洗ひ 茂美  
替玉が鼻をつまんで電話する 四郎  
一カブト替玉にして河へ落ち 陽子郎  
替玉を承知で策に乗って見せ 慈雨  
辻褄が合って替玉無事にすみ 一規  
金の前替玉さきり脱ぐ映画 千里  
漏電で書かれ火元の顔も立ち 昇  
漏電で済めばつながる首であり 藤四郎  
漏電が幸いしての焼け太り 雪峰  
漏電か知らぬが俺は焼け出され 司楼  
漏電にしてしまいたい顔が寄り ほなみ  
榮養が過ぎて体操苦手なり 吞喜坊  
体操の一人違つた手が慌て 蘇人  
ラジオ体操家も隣も朝の声 鳥石  
停車位置ちがえば行列もう崩れ 詩醉痴  
いたずらをする子行列からはみ出 伊三男  
行列の稚児母親に手を預け 嘉次  
働くとこぼつかり見せて蟻の行列 侃流洞

川維 小松支部句会 (石川県)

伊藤茶仏報

補助うけている子冬服だぶつかせ 香径  
冬服で真夏を駆けるエキストラ 宗太郎  
まだ買えぬ子等の服から冬となる 正柳子  
冬服の破れが貧しい父にする 茶の香  
新婚に当てられスチームではせ 吉枝  
除夜の鐘美容院はまきをたし 弄美絵  
公務員の雑談煙突赤く焼け 千太郎  
コーヒーが来る迄への窓にかき 芳郎  
停車場のストーブいろんな手が並び やすえ  
暖房に遠い机にまだ座り 城南

奥まった方へ常連消えてゆき 茶仏  
川維 大聖寺支部句会 (石川県)

野村味平選

給料の差が同権を押えてい 醉羊  
同権へ明治生れは耳かさずとよ 恒雄  
倦怠期男女同権持ち出され 武富  
井戸端の同権温泉行く話 久雄  
同権の記事を笑つた共稼ぎ 光郎  
同権の主張へ姑は氣に入らざ 枝  
風呂の順同権でない母が焚き 味平  
同権へ明治の母が氣むすかし

川維 高知支部句会 (高知市)

大西迷窓選

押し寄せて怪我するラッパの氣が知れず 正雄  
スイツチを入れたがラッパの聲が邪魔 草舟  
ひばりさん女のプアンの聲が怖くなり 古城  
返すかと百円札へ念を押して 蟠蛇  
未亡人訪れる秋なお淋し 花美  
秋風が吹いて置札探される 雄三  
病室に秋を持ち込むちんちんらん 楽天坊  
ウインドの秋のスタイル見て通り 松風  
この秋に退院しますと良い便り 海鳥  
妻が来て呑み逃げの様に連れ出され 汀  
目高の子供の声にパツト逃げ 順三  
孤独とこの世を逃げる術が欲し 和泉  
商売と思えば無理に笑ひもなし 醉雀  
無理一つ言わぬ女房で頼りなし 祥子  
日曜の無理がたつたて生欠伸び 俊一郎  
愛情に生きて生活に無理が出来 博  
死な子へ無理聞いてやれば良かったに 康之介  
これだけじゃ無理ねと二人まだ添わせ 直喜  
乗客は犠牲にされてスト続き 蟋  
犠牲には犠牲と云うて左遷され 蛇  
目に見えぬ犠牲母さん何時も負い 利子  
犠牲的精神発揮して疲れ 迷窓  
犠牲とも云える立場で持つ希望

川維 宇部支部句会 (宇部市)

津秋六花選

夕立のかくも涼しきトタン屋根 重人  
夕方と言う人生へちとあせり マサ子  
結局はトタンで急場しのぐ案 天作  
泊りがけ布団のけんか聞いて悔い 夫男  
夕方のてんやわんやへ子をどなる 義平  
夕方を忙しくチンドン屋が通り 綿花  
その儘に置いて置きたい様子が沈み 佐吉  
泊りがけでおいでと豊年から誘い 六花  
泊りがけで輝までに氣をつかい 豊年

川維 篠山支部句会 (兵庫県)

小西無鬼選

人工衛星大にも地球小さく見え 永断  
いい星見付けて地球潰す氣か みのる  
人工衛星明月冷ややかに眺め 一軒  
ジャズが鳴る飲屋の棚に稲荷さま 越山  
お稲荷さん執事のアラもろし召し 無鬼  
よろめいた二人逢う瀬に身を削り 喜天  
日曜大工直目を直すのに疲れ ひか平  
鉛筆を削るも入れた八時間 一雨  
喰べる毎胃は大丈夫かと笑われる よし子  
食欲も出ず食欲の秋に近き 雅佐女  
正一位稲荷の位衰えず 初穂  
禁酒して家計簿の赤削る氣の 宗吾

川維 明和病院支部句会 (西宮市)

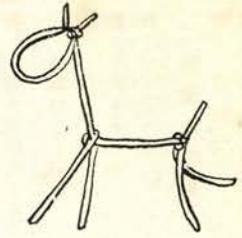
西尾青一路報

悪友の電話に妻の耳が立ち すゝむ  
旧悪を竹馬の友は皆あばき すみ江  
同期生だけのよしみがたかりに来 東雲  
「俺やがな」云われて友を思い出し すゝむ  
友情を重荷と思う時もあり 困男  
酒うまし其後も合つて見たい友 露月  
病床へ友情の花咲き乱れ 珠星  
金借してから友達の仲が割れ 星  
これしきの金に一人の友を売り 二平  
親友もライバルとなる狭き門 弘子  
夜更しへ友を選べと又云われ すみ江  
友達の無口が母の氣に入られ 夢路  
酒好きは此れが薬と徳利見せ 葎路

生命断つ葉の量の少なすぎ 舟遊  
幸福は葉に縁のない生活 留三  
こんな顔せねば飲めない胃のくすり 悟郎  
灸の跡菜きらいし古稀むかえ 丹謡  
御利益を信じながらもベニシリン よし  
新薬の効めと別に患者ふえ 紫路  
一錠の単価を出してよう買わず 鬼美  
農薬を死ぬる葉として人が散り 菘月  
妙薬も値段となつて人が散り 健二  
診察にヒスとも言えず葉出し 夕鈴  
週刊誌持つる程に読みませず 川太郎  
街録へ丸めて揚げた週刊誌 目印に丸めて振つる週刊誌 知司  
週刊誌ひろい読みして待合せ 善坊  
菊人形おかる勘平見頃なり 光一  
花電車軍人形の様に立ち 九里三  
菊人形大見得切つたままで暮れ 武者人形に時の流れの埃着せ 龜歩  
マネキンは裸のままで運ばれる よし  
コンクール人形の様な人は出ず ひかる  
文五郎人形とれば血が通ひ 夢人  
人形をためて十九の春を病み みつる  
置人形も手の届く子に育ち 東雲  
嫁つがずにこけしの数も年もふえ 文女  
マネキンは一足先に秋を着る 薫風子  
人形をためて男はみな嫌い 鬼美

館と料理と酒  
アベノ橋地下映画食通街  
千日前 大劇裏  
梅里の店  
★大万川柳(第八十三回)を募る  
兼題「中」年 路郎先生選  
締切 一月十五日 旬数五旬以内  
発表 一月廿五日 (店内掲示)  
投句は 阿倍野区松崎町三丁目  
一〇 大万川柳会宛

# 大万



### 編集録音

サテ、おめでとうござい

ます。逢うて嬉しきあれ見

やしゃんせチリトテチンと

葎乃先生の都鳥の振付をし

ていると、一三夫君につづ

いて梅志さんと編集部員が

集って来られるので、私も

服に着替えて集る。今日は

何と言っても先生を囲んで

の部会であることが嬉し

い。古方さんの人工衛星に

爆弾ならぬ爆笑が湧く。一

三夫君曰く、これだけチー

ムワークのとれた編集部は

他におまへんに、ジツと

汗が背筋をつたう。

(潮花)

★

古方さんが巨体をゆすつて前へ出て来られた。嬉しくなつて来た古方さんのポーズだ。前は火鉢。私はま

じまじと古方さんの顔を見ていると、やがて云い出されたのは、人工衛星が飛立って以来の古方さんの哲眼に靈感が映って来たらしく、ぐりぐりと目を動かしお尻をゆすつて先生に喰下つて行く。私も少し嬉しくなつて来たので、お茶を一パイすすつてみた。

(梅志)

★

新年号の門出を祝つて、葎乃先生がばいばい爛けてくださる。その道のA組一飄氏、B組梅志氏、C組古方・潮花氏、O組一三夫。特A組の路郎先生はご病氣以來一滴も召されぬ意志の強さをここでも示めされる。

先生が揮毫されるものに、おそらく酒の匂いのせぬものは、ないのではないかと思う。「こんどの全出席者におくる短冊はチョッ下珍しいよ」とご静養中の先生が、酒なしで筆を執られる短冊はその意味においてたしかに珍しいものである。

「第二教室」を入門講座とした。前号中島生々庵氏の「一路集の選をして」が好評だったので、いろいろの講座を設けてゆきたい。そのためには「こういうものをききたい」と、皆様からのお声を参考にしたいと思つている。戸田古方氏担当の「研究題」も授吟はいつもの倍という好調である

表紙が門ならトビラは女関である。本文が色とりどりの部屋ならこのページは奥座敷である。その奥座敷でもアグラ組みするボクの文章は別として、本文の各部屋は美しく飾りたい。そのためには良い調度品である良い原稿がほしい。

放送局や新聞社等から先生の原稿を急いでくる。ボクもボクなりに新年号用に三、四書かされた。「よその新年号がウチより早く出来てしまふね」と先生が苦笑される。師走の22日11時40分からNHKの「お休みの前」に先生の随筆「髭」が放送され好評だった。(一三夫)

## 川柳雑誌社

- 麻生路郎
- 麻生葎乃
- 中島生々庵
- 西尾 栞
- 編集局
- 北川春巢
- 戸田古方
- 清水白柳子
- 八木摩天郎
- 丸尾潮花
- 真鍋一瓢
- 水谷竹荘
- 福田妄夢
- 後藤梅志
- 不二田一三夫
- 句会部
- 黒川紫香
- 総務部
- 武部香林
- 林 宏子

## 新春を賀し奉る

社告  
川柳塔出句に就いて  
新春を期して諸氏の自選方向上のため川柳塔出句は十句以内としました。せいぜい名吟を寄せられんことを。  
川柳雑誌社



結婚式場  
長生殿

神殿(2控室)16宴会場  
(和洋)御待合室・更衣室・美容室・写真室のほか、貸衣装一切を完備しております ●6階

金曜 定休  
松坂屋  
大阪日本橋三

麻生葎乃著・米田三男之介装幀

## 福壽草

定価 二百五十円  
送費 三十円  
菊半型・函入

川柳の母・麻生葎乃女士の異色ある作品の金字塔です。各方面から御好評をいただいで居ります。

大坂市住吉区万代西五の二五  
発行所 川柳雑誌社

電話(住吉) 六〇八一  
電話(本町) 七五〇五

安産のために  
安産のくすり



## ワダカルシエム

ビタミン入小粒二〇〇円  
ワダカルシエムは妊娠中なるべく早目からおのみ下さい。

<p>所題時 17日(金)五時 味・終電・大物 扇橋交通局病院</p>	<p>所題時 14日(火)六時半 犬・天王寺 大道一ノ二二・天王寺小学校</p>	<p>所題時 11日(土)六時 初出勤・大笑い・実力 堺市老松町・島野工業会議室</p>	<p>所題時 30日(木)六時半 舞扇・曲り角・丁稚 難波駅高架下・親和倶楽部</p>	<p>所題時 23日(木)六時 運・仲人・玉葱 玉出新町通一ノ一一・梅志居</p>	<p>所題時 22日(水)六時 モーニング・野良犬・焚火(こんど) 旭町二丁目・金塚会館</p>	<p>所題時 14日(火)六時 犬・流感・酒 東淀川郵便局</p>	<p>所題時 10日(金)七時 雲・犬・羽根 宰相山町一四二・西出一栄居</p>	<p>謹賀新春 川柳雑誌社各支部</p>
<p>所題時 弓削句会 月末メ切(投句のみ) 一度・春の風・甘える 近祿五句 久米郡久米南町聖・直原七面山</p>	<p>所題時 16日(木)夕 茶・招く・金色 四条糺手・仲源寺</p>	<p>所題時 15日(祭) 発展・手伝い・ゴム長・駅 啓成校裏・小谷節被居</p>	<p>所題時 12日(日)十一時 機織・待来け・恥・体当り・化粧 水島弥生町四ノ三・福原一善居</p>	<p>所題時 12日(日) 飾・日本髪・初詣・餅 西枇杷島・菱批事務所</p>	<p>所題時 12日(日)一時 二日酔い・犬・親指 東区恩田長沢・津花六花居</p>	<p>所題時 12日(日)一時 お詣り・看板・袋 立町池富旅館(関電寮)</p>	<p>所題時 12日(日)一時 雲・希望・灯 下関鉄道職員会館</p>	<p>小松句会 4日(土)一時 早起・会費・職・愛情 竜助町寺尾有芳堂</p>

# 初詣は正恵方 の南海沿線へ

**住吉大社**    水間観音    方違神社  
                     大鳥神社    百舌鳥八幡宮

電気冷蔵庫が当たる恵方くじ  
 正月3カ日なんば駅で進呈

## 南海電車

スリートを  
着心地のよい

# O.S.K.

## レディモード

**大坂商店**  
 大坂市東区長瀬町一丁目三番地  
 電話 94-1745・5563番

投句用柳箋  
 一冊(五〇枚綴)三〇円  
 送料二き八円

printed in Japan

(禁博載)

## 川柳雑誌 第十三巻

B列5号 毎月一回一日発行  
 第一号  
 定価 五〇円 (送料四円)

半力年 三二四円  
 一力年 六〇〇円

昭和三十三年十二月廿五日印刷  
 昭和三十三年一月一日発行  
 大坂市住吉區内方代西五丁目二五番地  
 行印別入宛 麻生幸二 一郎

**発行所 川柳雑誌社**  
 大坂市住吉區内方代西五丁目二五番地  
 電話 大阪 六〇八一  
 郵務口番 大坂 七五〇五

### 投稿規定

▼ 投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。  
 ▼ 『近作柳摺』は一般作家の雑吟を募る。  
 ▼ 『課題吟』は誰でも投句が出来。『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。

### 募 集

#### 課題吟募集

丹前 (廿句以内) 菊沢小松園選  
 駅前 (廿句以内) 長野 井蛙選  
 小運包 (廿句以内) 川村 好郎選  
 (廿句以内) 浜田久米雄  
 (二月二十日締切)

#### 每号募集

近作柳摺 (雑誌廿句以内) 麻生路郎選  
 川柳 坎合 (雑誌十句以内) 北川春葉選  
 文章(評論・研究・感想其他) 麻生路郎選  
 (前月二十日締切)

# 不眠 昼間療法!



昼間の服用だけで、夜自然に安眠  
ができ、日中のイライラや不安感  
もとれ、明朗・能率的な生活を送  
れる習慣性のない安全な新薬です  
スッキリした頭で作句の為にも!  
晝はすつきり・夜はぐつすり



東京・大阪 山之内製薬株式会社 福岡・札幌

日中のイライラをおとしめる

昭和二十二年七月一日 第三種郵便物認可  
昭和二十二年一月一日発行 毎月二回二日発行

編集 柴田 隆  
発行所 川柳雑誌社  
大阪市生野区内万代西五丁目二番地 電話大阪六〇八一 番替口俵大阪七五〇五番



## お伊勢さん 初詣

### 記念乗車券前売中

発売所 近鉄観光案内所・日本交通  
公社・近鉄 奈良電各駅

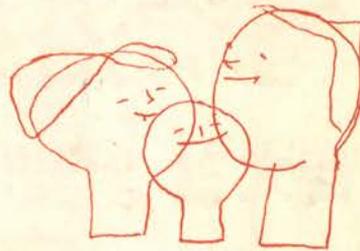
ご乗車 12月31日から1月15日まで  
おおみそか主要線終夜運転

★初詣は暖かくてお楽な近鉄特急で  
31日→7日・12日・15日 大增発  
往復特急料金 400円 発売中

初詣記念乗車券お買上げの方に  
皆さまのニッケから 豪華賞品の当  
る おたのしみ券をさしあげます

近畿日本鉄道

### 一家そろってホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL 64551-2

麻生路郎先生著

### 川柳とは何か

—川柳の作り方と味い方—

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。  
絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたもろ  
もろが十七音に圧搾された諷刺と諧謔の短  
詩型、それは伝統的であると共に常に革新  
的であるその川柳がいかんして發生し、経  
過し、今日に至り、将来に動くか、しかも  
その作り方は、味わい方は——以上を最も  
明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる  
著者が答えているのが本書である。

送価 二五〇円  
三三〇円

取次所 川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区払方町27 振替東京29507

定価五十円 (送料別)